



始



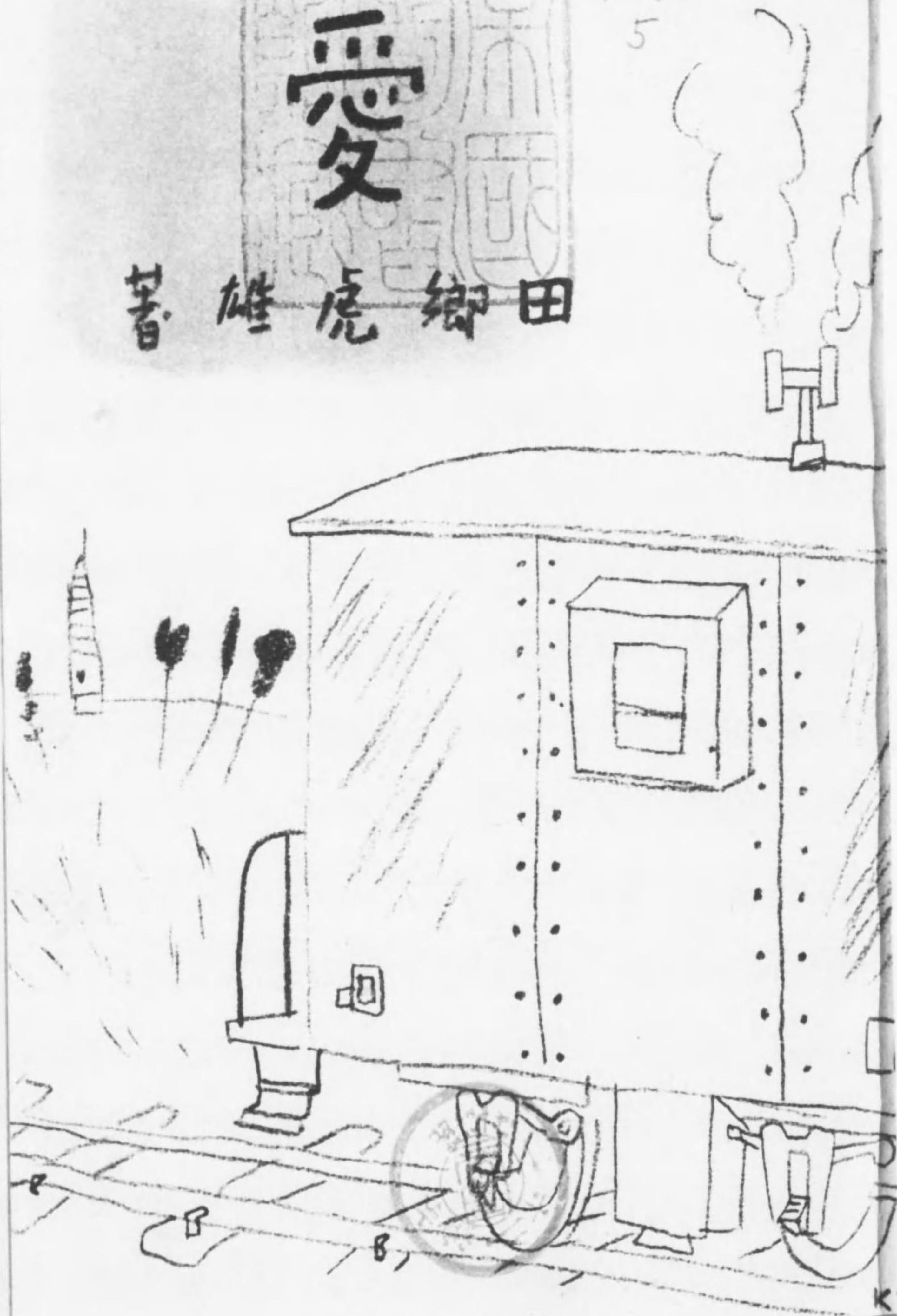
25

12 / 1

F13
TA18
5

愛
父

著 雄 虎 郷 田



957

120

序

日本人のすべてが、いま無意識にもどめてゐるものがある。いろいろな方面にそれがある。例へば小説にしても、今までのどんなものよりも身近な、それでゐて、おほらかなものを、それとははつきり言へないけれども、みんな心のなかで探してゐるやうに思ふ。

作家はむろんそれに氣づいてゐる。しかし、書くといふことはひとつの習慣であるから、思ひきつて自分の殻を破らなければ、新しい方向に進むことはできない。準備はもうできてゐる。機會が與へられ、ばい、のである。

たまたま、私が翼賛會文化部の仕事をしてゐる關係で、今度陣容を建て直した翼賛出版協會から「健全で面白い小説」の出版について企劃の相談をうけた。

私の頭には、すぐ數名の中堅作家の名が浮び、その才能、思想、氣魄の点を、私の考へてゐる「日本人全体を對象とするやうな小説」の執筆の依頼をしたらといふ事が即座に決定したのである。

同僚の上泉君とも人選について慎重に打合せをした。



愛

みんな快く引受けてくださった。

國民文學といふやうな名稱をわざわざつけなくてもいい。つまり、ある一定の讀者——知識層とか大衆とか、或はまた文學に縁のあるものとか、忙しくて時間がないものとか、婦人とか子供とか——とにかく、特別な條件のついた讀者の範圍を頭において、これまでの小説は書かれてゐたのである。さういふものもあつていいけれど、さうでないものがないならばならぬ。これこそ、私たちが、いま、文學にもどめてゐるものではないかと思ふ。そして、これは作家にとつて最も困難な、しかし命をかけても惜しくない道である。

出版者側のかなり非打算的な協力を信頼し、作家諸氏の熱意と努力とを私は感謝をもつて見まもつてゐる。

田郷虎雄氏の『愛』は、かくしてこゝに脱稿をみたわけである。これ以上、私はなにも云ふ必要はない。ひろく讀まれることを希ふばかりである。

昭和十七年九月一日

岸 田 國 士

縁談

「ママちゃん。……ママちゃん！」
階下の茶の間から母が呼んでゐるのを、はつきりと感じてゐながら、雅子は、せつせとノートの上にペンを走らせてゐた。するする、するする……と、ペンは、まあたらしいノートの上を、左から右へ、左から右へ、氣持よく軽くすりつけてゐる。それを追ひかけるやうに、雅子の品のい、唇からも時をりつづやきの聲がもれる。

「……醫化學は……生活の學問で……生體生活の現象を……」
習ひはじめたばかりの醫化學であつた。若い雅子の胸は、あたらしい知識の世に足をふみ入れる喜びにあふれ、ノートの整理をするのと同時に、それを自分

の知識にしようとして、一生懸命であつた。

「……動物のとる有機養素は……直接または間接に、これを植物界にとり……植物は……養素として……空氣および地中より……水……炭酸……燐酸塩……硝」と、つぶやきかけた時、

「ママちゃん。……ママちゃん！……マサコオ！」

と、母の聲は、意外にも、いつのまにか階段の下まで迫つて來た。

雅子は、あわてて、ペンを持ったまゝ、はじめて顔を右——階段口の方に向けた。

「なあに、お母さん、——御用なの？」

「ああ、すこし話してみたいことがあるんだけどネ、——いま忙しいの？」

「い、え、それはかまひませんけれど——」

「ちや、ちよつと降りてらっしゃいよ、さいはひ、上等のお茶うけもあるから」

「ええ、ちや、いま……」
ぐづぐづしてゐると、母は二階へ上つてくるにちがひない、と思つたので、雅子は、いそいでペンをおき、ノートをとちると、パチンとスタンドの灯を消して立ちあがつた。

茶の間の六疊は、いつものことながらキッチンとよくかたづいて、何ともいへない暖かさ、なごやかさを漂はしてゐる。雅子はこの部屋の空気が好きであつた。これは母によつて醸し出される、わが家の空気がある。この空気の中でならば、四人の子供がみんな、のびのびと、めいめい好きなことをいひ、好きなことをする事が出来るのである。

「なあに、お母さん、その上等のお茶うけつて？」
いつもは父がすわる大きな座布団の上に、そつと腰をおろして、もうさういふ季節でもないのに、雅子は両手を火鉢にかざした。が、すぐ、

「あ、それより、なあに、お母さん、お話つて？」

と、ちよつと改まった顔をして、お茶を淹れようとしてゐる母の顔を見つめた。まともに娘から顔を見つめられると、いつも自分の方からさきに目をそらすくせのある母は、答へるかはりに、火鉢の横の茶ダンスをあけて、

「ほら、どう、珍らしいだらう？」
と、お菓子鉢を出した。
たつぷり一寸はありさうな、厚目に切られたカスターラであつた。

「ほう、すてきね！ ホンモノ？」
「ホンモノですとも、長崎から今日ついたばかりだとおつしやるのを、ちやうだ
いしたんだから——」

「へええ、すごいわね、——で、いつたい、どこから？」
「どこからだつてい、から、ま、ひとつおあがりよ」

「ええ、そりやも……」

もちろん、いたゞくわ、といはうとして、急に、

「あ、わかつた、永瀬さんね！ あぶない、あぶない—

と、一度は伸ばしかけた手を、あわて、ひつこめ、首をすくめて見せて、

「ね、さうでせう、お母さん？ だめよ、しつかりして下さらなげやア、カステ

ーラなんかで釣られちや、あの奥さん、とてもお話が上手のうへに、ねばり屋さ

んならしいから、なあんで、やつぱりいたゞくわ、損だから」

カステーラのひときれをつまんで、雅子は笑つた。

笑ふと、ぼくりと左の頬にエクボが浮き、白い前歯の瑠瑠がチラと光つて、と

ても美しかつた。そして、ふだんは母にさへもちよつと近よりがたいやうな氣品

のある、どちらかといふと面長の、輪廓のはつきりとした端正な顔が、一瞬に、

なんともいへない生々とした美しい表情になつた。まつたく、それは豊かな魅力の

ある表情であつた。

しかし、母は笑はなかつた。

母は娘によく似た品のい、面長の顔に、不安と不満の色をうかべて、さぐるや

うに娘の様子を見まもつた。母の目は、まつさきに、娘の頭の髪に向けられた。

女学校の三年の時から伸ばしかけて、卒業の頃には立派に伸びておさげにしてゐ

た癖のない豊かな黒髪を、をしげもなく又もや断髪し、申しわけばかりに鑢など

あてて、ふさふさと襟に波打たせてゐる、さうした娘の無造作な姿を、それはそ

れなりに美しとは思ひながらも、しかし母は不満であつた。

母は娘の肩に目を移した。これも女学校の三年生の時にこさへてやつた紫矢紺

の銘仙の着物と、とき色の地に桐のしぼりの羽織を、雅子は卒業と同時に自分で

肩あげをおろし、制服の時のほかは、よそゆきにも、ふだんにも、それを着てゐ

る。今夜のもそれである。ものは悪くはないのだから、それはそれでかまはない

わけだが、しかし肩あげの跡だけが新しく、はつきり目立つてゐるのを、雅子は平氣でどこへでも着てゆく。そのかまはなさかげんが、母にしてみれば氣になるのであつた。

それから、母の目は、娘の肩から、カステラーラをつまんで口に運ぼうとする、その娘のきやしやな手に移り、右の人差指に痛々しく盛りあがつてゐるペンや鉛筆のタコにとまつて、とうとう顔をしかめた。

「マアちゃん」

さりげなく切り出さうとする母の聲は、かへつてひとりでに改まつてゐた。

「なあに、お母さん？」

娘の方が上手であつた。雅子は口をモグモグやりながら、その黒く澄んだ大きな目で、まつすぐに母の顔を見つめた。母はまた目をそらした。

「お茶は濃すぎやしなかつたかい？」

母は出直さなければならなかつた。

「い、わ、どうせ今夜は少しおそくまで起きてるつもりだから……」

「だつてお前もうまもなく十時だよ」

「だから十二時……」

「そんなお前……」

「ウウン、大丈夫よ、ナボレオンぢやないけど、私、いつたん眠つたら四時間か五時間で人の十時間分ぐらゐる、ぐつすりと眠つちやふんだから。——それより、ねえ、お母さん、これ、ほんとに永瀬さんから戴いたんですか」

「ええ、永瀬さんの奥さんがね、今日の正午すぎまたいらして……」

「あそこもお國は長崎だつたかしら、——さうちやないでせう？」

「い、え、お知合ひの方がね、長崎へ出張なさつたさうで、その方にわざわざお頼みして、とりよせなさつたんだつて、はじめから家にも分けて下さるおつもり

でね」

「ごしんせつね！」

「あんたはすぐそんな皮肉をいふけれど……」

「あち、皮肉ぢやないわ」

「い、え、そりやね、母さんだつて正直なところ、あの奥さんは好きぢや……い、え、好きや嫌ひより、なにしろ、まるで御氣風がちがふからね、私なんかとは——だけど、あの方はたゞ橋わたしをして下さるだけで、なにもあのお宅へお嫁にゆくといふわけぢやないんだから……」

「ええ、そりやさうよ」

「だからさ、ねえ、マアちやん、あんた、ほんとにどう思ふ、あのお話？」

「あのお話つて牧野さんのこと？ なら、たいへん結構なお話だと思ふわ、地位があつて財産があつて、御本人も立派な方だといふし……。ちよいと申分のないお

話ね！」

「ちや、あんた……」

「い、え、それは別よ、それなら私もうはつきりお答へしてゐるつもりだけど」

「といふと、どういふの？」

「ほら、第一に私このとほりまたオカッパになりました。あいにくなことには、すぐには伸びてくれません」

「でも、それは……」

「それから、私、やつと女子醫專に入つたばかりです」

「ちや、あんた、やつぱりどうあつても、あそこを卒業するつもり？」

「それはわからないけれど——」

「卒業までには五年もかゝるといふぢやないか、五年もしてこらんな、いまはまだ十九でも……」

「二十四ね！……二十四の春だわ」

「でも、それですぐお医者さまになれるわけぢやないのだらう？」

「むろんよ、それから二年なり三年なり研究科生として學校に残るか、どこかの病院なり研究所なりの……さう、どうしても八か、九ね！三十までに何とかなればいゝ方だわ、ちよつと憂鬱ね！」

ほんとにちよつと憂鬱さうな顔をした。それに勢ひを得て、

「だからさ、なにもお前……」

と、まくし立てようとするのを、

「ねえ、お母さん」

と、軽くはづして、

「真面目な話、三十ではお嫁にもらつてくれる人ないかしら？」

「なんのためにムザムザ三十まで年をとらうといふの？」

母はもう腹を立て、ゐた。すぐそのあとに溜息と愚痴と、この娘には大して痛くもなささうな皮肉とがまぢつた。

「きりやうだつて頭だつて、親の慾目か知らないけれど、十人並の……十人並以上の娘に生れついてゐながら、なんの因果で……い、え、そりやもらひ手はあるだらうよ、三十だつて四十だつて、女にすたりものなしといふからね。だけど、どうせさうなれば、二人も三人も子供のあやうな人の後添ひだとか……」

「年をとつたお金持の……？なるほど、考へものね！」

「考へておくれよ、ほんとに、ねえ、雅子、あとには三人もまだ子供がゐるんだよ、それに家はお父さんが、あのとほり主義だとか主張だとかに生きる人で……ねえ、だから、勉強の出来るお前としては尤もは尤もだけど、御大家のお嬢さんがたのやうに、女の身空でいつまでも學問だの研究だのといつてゐられる身分でもないんですからね」

「ええ、それは私も考へてゐるつもりなだけけれど、——でもね、お母さん、いつとき黙つてゐて下さいよ、お願いですから。でない、せつかくの永瀬さんの奥さんの御好意もノドを通らないわ」

そこで母も仕方なく笑つて、娘の湯呑にお茶をつぎたした。

柱時計が十時を打つた。それを數へをはつて、

「おそいねえ、お父さんは、——私、毎晩々々お父さんの御無事なお顔を見るまでは、ほんとに気が氣ぢやなくて。……あ、あ、罷業だの怠業だのと、いやなものなけりやいゝのにねえ」

「お母さん苦勞性ね、ほんとに！ どうしてさうなんでせう。信心家らしくもないわ」

「い、え、母さんは神さま佛さまを信じてゐますよ、正しい人にはきつとお味方して下さるつて、だけど……」

「でもね、お母さん、お父さんの反對側の人にはせると、宗教はアヘンなんですつてさ」

「アヘンだかエヘンだか知らないけれど、母さんは……」

と、いひかけた時であつた。

ガターンと玄關の格子に人のぶつつかる音がし、つゞいてガラリとその格子が開けられるのと同時に、

「しげ！ しげッ。……雅子！ おい。早く、早く！」

と、あわたゞしく呼ぶ父の聲がした。

「まア、どうなさつたんでせう？」

いちはやく雅子が立ちあがつてゐた。玄關へいそいだ。すぐに母のしげ子もそのあとを追つた。

父と一人の青年が、肩を組みあつたまゝ、玄關の格子をはづれさうにがたつか

せながら、よろよろとよろけこんで来た。

「まあ、どうなさつたんですの、お父さん？」

雅子は思はずタビはだしのまゝタタキに降りて、父の腕に手をかけようとした。すぐにその手は拂ひのけられた。

「お父さんぢやない、進太郎君だ、進太郎君だ！ 雅子、手を貸してくれ。母さんは早くフトンを座敷……いや、離れた、離れが静かでない、すぐ用意してくれ」

さいはひ、その離れに寝てゐた一夫も次夫も、座敷のすみに假寝をしてゐた末

ツ子の光子も、このさはぎに目をさませられて、とびおきて来てゐた。

「おゝ一夫、おまへ光子でもつれてな、あそこのポストのある十字路に進太郎さんの荷物がおいてあるから、すぐ持つてきてくれ。次夫は山田さんに駆けて行って、先生にすぐ来て下さるやうにつて。——さあ、雅子！」

言下に三人の子供は戸外へとび出し、母もすぐ離れへ走つた。

雅子は腰をかゝめて、

「さあ、進太郎さん」

と、その大男の青年の靴に手をかけようとした。

「すみません、だ、大丈夫……」

大男の……いや、高木進太郎は、自分で靴をぬがうと足を振らうとしたが、たちまち、どこが痛むのか急に顔をしかめ、齒がみをして、ウウムとうなつた。

雅子は手ばやく靴を脱がした。そして、もう一度、

「さあ、進太郎さん！」

と聲をかけて、青年の還ましい腕を自分の肩にかけさせた。

茫洋たる男

進太郎は、ふツと目がさめた。目の上に天井があつた。布袋さまがあぐらをかいてるやうな形に見える天井板の木目が目についた。その木目から、彼は、自分がいま、亡母の従兄である室伏陽三の家の離れに寝てゐるのだといふことにすぐ気がついた。

彼はもう三日もこゝに寝てゐるのである。

「いやア、われながら少々だらしがなさすぎた……」

彼はさう思ひ——いや、思つただけではなく、ちやんと口にも出して、さうひとりごとをいひ、苦笑しながら、自分がこゝへつれこまれた夜のことを、しづかに順を追つて思ひうかべてみた。

進太郎——高木進太郎は、故郷の佐世保市を立つて、下關から東京ゆきの三等特急に乗つた。その列車は翌日の午後三時か四時には東京驛につくはずであつたが、彼が下車するつもりでゐる大森驛には停車しないので、ふと思ひついて横濱

で途中下車をした。先輩の知人を訪ねる氣になつたのである。その先輩の家で無理に夕食をすゝめられ、話しこんでゐるうちに時間が経ち、彼が大森驛についた時には、もう九時を過ぎてゐた。

「こんな時分に、いきなり前ぶれもなくとびこんで行つたら、室伏の小父さんちでは迷惑かな」

さう思はないではなかつたが、いまさら仕方がないので、右手に、いさゝか時代がかつた大仰な大型トランクを、しかし、いとも無造作に、かるがると下げ、左手には、これも學生時代ずつと使ひ古して、いまでは黒革が灰いろに變つてゐる大型の手提カバンを、下關のウニの瓶詰や静岡のワサビ漬と一しよにぶらさげて、山王口から改札を出た。折よくやつて来た荏原町ゆきのバスに、イの一番にとび乗つた。乗客は案外に多く、まつさきに乗れこんだ進太郎は、その大きな荷物と一しよに、すつと奥の方へおしやられた。自分は途中下車なんだから困ると

思つたが、仕方なかつた。やがて東一丁目の停留場についた。彼はそこで降りるのである。さんざん骨を折つて、やつと降りた。さうしてぐづぐづしてゐるうちに、さきに降りた人の一人が、ちやうど彼がこれから行かうとする左への道を、二三メートルさきに立つて歩いてゐた。もう四月だといふのに、まだ冬物らしいオーバーを着、おまけにその襟を立てて、ふかふかと顎をうづめ、なにか考へごとをしてゐるらしく、うつむきかげんに歩いてゆく男の、そのがつちりとした體つきから、

「おや、——あれは室伏の小父さんぢやないかな？」

進太郎はさう思つて、足を早めた。

その人はやがてポストの立つてゐる十字路から、これもやはり進太郎がこれから行かうと思つてゐる右の道へ折れて、すぐにケヤキの木立で暗くなつてゐる露地にさしかゝつた。すると、その木立の蔭から、ばらばらツと五六人の暴漢がと

び出して、その人を取りかこみ、行手をさへぎつた。

とつさに進太郎は、荷物をポストの側において、駆け出して行つた。

「君たち、何をやる！」

右と左からその人の腕をねちあげようとしてゐる二人の暴漢の一人を、つきとばすやうにして、進太郎は、きめつけた。低い、しかし底力のある聲であつた。

「手前こそ何だ？」

その暴漢がどなつた。

「おれたちは、この室伏陽三に制裁を加ふべき理由があつて制裁してゐるのだ」

他の一人がいつた。

「真理の名によつてやつてゐるのだ」

「しやらくさい真似しやがつたら承知しねえぞ」

「それとも手前もこのイヌの仲間か」

「それとも用心棒か」

「なんでもええ、ひつこんでろい、ひつこんでろい！」

五六人が口々に罵つた。口で罵るだけではなく、中の一人が背後から進太郎の尻をイヤといふほど蹴つた。進太郎は、カッとした。来い！ ともいはず、一人を足がけで、どすんと投げとばし、別の一人を背負ひ投げた。目にもとまらぬ早業であつた。さうして三人目の胸倉をつかんでひき倒さうとしてゐると、敵の一人が背後からとびついて来て、進太郎の首に両手を廻した。振りはなさうとしても、ダニのやうに離れなかつた。さうするうちに、だれかが棍棒のやうなステッキで、いきなり進太郎の向ふ脛をグワンと力まかせに殴りつけた。進太郎は、ダニ……ダニのやうに食ひついて離れない男を、背に負つたまゝ、ばつたりと倒れた。ぐわんと頭を地べたにたゞきつけた……か、どうか、それはわからない。そのまゝ彼は氣を失つたのである。

氣がついてみると、進太郎は、だれかの膝に抱かれるやうにして、地べたの上に仰向けに寝てゐた。なんともいへない不快な頭の鈍痛に、思はず顔をしかめながら、目を細くあけてみると、すぐその目の上に心配さうに自分の顔をのぞきこんでゐる小父さん……室伏陽三の顔があつた。

「お、氣がついたかね、進ちやん」

陽三が救はれたやうな聲を出した。

「あ、小父さん、奴等は……？」

「ウン、思ひがけない強敵にとび出されたもんで、泡を食つて退散したよ」

「で、小父さんは……？」

「ありがたう、君のおかげでかすり傷ひとつ負はないですんだ。——しかし、すまなかつたな、とんだ目にあはして」

「なあに」

進太郎は立ちあがらうとした。クラクラと目まひがした。

「無理だ、無理だ、いま歩くのは。しばらく辛抱しておいで、いま家の者を呼ぶから」

「なあに、大丈夫ですよ」

進太郎は陽三の肩につかまり、齒がみをして立ちあがった。

「小父さん、ぼく、大丈夫ですから、荷物をお願ひします、手提カバンの方にオヤヂとオフクロのお位牌が入つてますから」

「よしよし、わかつた。——さあ、行かう、歩けさうかね？」

二人は、たつた五分とはかゝらない家までの道を、よろよろと、もつれふふやうにして、やつとたどりついた。

醫者が呼ばれた。内科専門の山田醫師は、おそらく頭の痛みは地べたにたゞきつけた時に軽い脳震蕩をおこしたためであらう、もしも不幸にして骨折や内出血

があつてゐれば大變なことだが、たぶんそんなことはないだらうと思ふ。が、安心のためにはレントゲンにかけてみるがよい。自分の方に来てよし、その方の専門醫を紹介して上げててもよい、といった。陽三や雅子は、しきりにそれをすゝめた。進太郎は大丈夫だといつて反對した。一晩ぐつすり休めば癒ると信じ、それをいひはつた。たゞ、向ふ脛の疼くやうな痛みには閉口だつた。そこには濕布がほどこされた。雅子が上手にやつてくれた。母のしげ子はオロオロしてゐるばかりであまり役に立たなかつた。

あくる日の朝、——つまり昨日、進太郎は自動車を呼んでもらつて、山田病院に出かけた。雅子がついて来てくれた。學校があるだらうからといつて進太郎はことはつたが、一時間か二時間おくれるだけのことだからといつて、つき添つて来てくれたのである。

診察の結果は何も心配することはなかつた。醫師は、進太郎の均整のとれた五

尺六寸八分といふ立派な體格を見て、

「かういふ殺しても死にさうにもない丈夫な人は、たまにはかういふ目にでもあつて、すこし静養した方がいゝですよ」

と笑つた。

苦笑しながら、しかし、すっかり明るい氣持になつて、進太郎はまた雅子につきそはれて歸つた。それまで結果を氣づかつて工場にも出かけずにゐた陽三も、すっかり安心し、雅子と前後して出かけて行つた。あとは小母のしげ子だけ、ましてこゝは離れなので、部屋の中は、しんとして静かであつた。進太郎は一日中ぐつすり眠つた。雅子が學校から歸つて來て、様子を見に來て聲をかけてくれるまで、眠りつゝけた。

「進太郎さん、いかゞ？」

雅子は制服のまゝ縁側から入つて來て、そつと枕もとに横膝にすわつた。

「ありがたう、もうすっかりいゝですよ、足が少し痛いだけだ」

「さうさう、私、その足の濕布についていゝこと聞いて來たわ。學校で外科の先生に伺つてね、お薬もいたゞいて來たの。いま手當して上げませうね」

「わるいなア、すっかり雅子さんに世話を焼かして、——すみません」

「ウウン、すまないのは家よ、あなたのおかげでお父さんは……」

「そんなこといはれると、いよいよもつて恐縮だなア、——いゝ圖體の若い男が敵に向ふ脛を張られて、氣絶して擔ぎこまれて來るなんて、いやはや、さんさんな話だ」

「ホ、。ほんとにさうよ、なんのために進太郎さん擊劍はやつたの？——だつて三段か四段でせう？」

「どういたしまして、やつと二段ですよ」

「それに野球だつて選手でせう、——主將ぢやないの？」

「冗談！ 野球は好きで時々やっただけのことさ、首将なんて……」

「それにしたつてよ、スポーツも實戦に役に立てないやうでは意味ないわ」

「はいはい、これからはせいせい背後から来る敵にも氣をつけますよ。——しかし、あひかはらずだなア」

「え、なにが……？」

「なあに、あひかはらず辛辣だといふのさ、マアちゃんは！ ——で、どう、面白い、女醫先生の勉強は？」

「面白くもなにも入學してまだ十一日よ、講義を聞いたのが、やつと九日、正確にいへば四十三時間半よ、一時間半だけ進太郎さんのために今朝つぶしちやつたから」

「まことに相済みません」

「さうさう、相すまないついでに、ちや、濕布をとりかへませうね。——でも少

し痛いかも知れなくつてよ、なんせ、まだヤブなんだから」

さういつて立ちあがった時の雅子の、匂ふやうな美しい生々とした微笑を、進太郎は、いま、はつきりと思ひうかべた。すると背筋がすーッと涼しくなるやうな、なんともいへない快さに、おもはず胸のときめくのおぼえた。が、すぐそのあと、彼は、

「こりやいかん、おれはどうかしてゐるぞ」

と、つぶやいて、布袋さまがあぐらをかいてるやうな天井板の木目を、しばらくヂツと見すゑてゐた。

「この氣持はどうもをかしい、すると、おれは……」

おれは戀愛といふ奴にとりつかれたのかな、と思つてみたのである。そいつは思つただけでも少々てれくさい話だ。おれは一生さういふ眞似は出来さうにもない武者だ、と彼は今まで自分できめてゐたのである。しかし、考へてみると、

女性に對してこんな感じをいただいたことは、少くも二十五年のこれまでの生活の中には一度もなかつたことだ。すると、やつぱりさうなのかな、と思ふ。さうであつても少しも不思議はないわけだ。おれも男だ、若いのだ……。

「だが、待てよ、もしさうだとすると、こいつは少々考へてみなくツちや——」
そこで進太郎は考へはじめた。

進太郎は、母の膝もとで中學をすますと、その母ひとり子ひとりの、さびしい母に少しでも心配をかけまいために、高等學校も九州を選んだが、そこを出るとこんどは思ひきり遠く北海道へ飛んで、北大の工科を出た。その北大時代の休みの歸省の行きか歸りかに、母のいひつけもあつて、この室伏家に一日か二日づつ世話になつたことが、前後で三四回はあつた。最後の訪問は、大學の最後の夏休みであつた去年……いや、もう一昨年、七月であつた。卒業の時は是非とも寄るやうにとすゝめられてゐたにもかゝはらず、母の病篤しとの知らせに驚いて、

どこにも寄らず飛んで歸つた。寄れば、——高木家も室伏家も、ともに親戚が少いせゐるか、小父も小母も小さい子供たちも喜んで親身に迎へてくれた。が、雅子は……？

雅子もその頃はまだ女學生であつた。その頃から美しい頭のよい少女であつたが、それだけに理窟ツぼくて、よく進太郎にも議論をふツかけた。議論すると、どうも進太郎の方の旗色が悪かつた。進太郎は議論が嫌ひである。時には相手のしつこさに僻易して、わざと負けてやつたこともある。すると雅子は勝ち誇つて「大學生なんていつても、いゝかげんなものね！」

などと生意氣なことをいつた。

「だけど、進太郎さんは偉いわ、どんなこといはれたつて怒らないんですもの。そんなひと、私、好きよ。——だつて、そんな人は、きつと、よつほど偉い人かでなげや……」

「ばかさ、どうせ僕はバカだよ、そんなこと今ごろ気がつくなんて、マアちゃんも案外りかうちやないね」

「そんなこといふ人きらひよ」

「きらはれて、さひはひ」

「フーン」

こんな思ひ出を幾つ並べたところで、雅子が進太郎に好意をもつてゐるといふことの證據にはなりさうにもない。

もつと古い思ひ出もある。

佐世保時代に今のしげ子と結婚した室伏陽三は、佐世保海軍工廠を振出しに、朝鮮仁川鐵工場、神戸川崎造船所、吳海軍工廠を経て、最後に現在の×××造船所に入つて、東京に居をかまへることになつたのであるが、その仁川時代に、しげ子の健康上の都合で、當時やつと六つであつた雅子を、しばらく進太郎の家に

預けたことがあつた。ホンの半年ばかりではあつたが、雅子はすっかり進太郎の母になつき、殊に進太郎には「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と慕つて、學校に行く時も後を追つて泣き叫ぶほどであつた。一人息子の腕白小僧であつた進太郎も、急に妹が出来たやうな喜びで、幼い雅子に對しては聞きわけのよい優しいお兄ちゃんになつて、よくかはいがつた。

その頃の思ひ出がいま進太郎には不思議とよく思ひ出される。そしてそれは一幅の童書を見るやうな美しさと、ほゝゑまじさに満たされてゐる。だが、その追憶の童書を雅子が同じ思ひで眺めてくれるか、どうか、それは問題であつたし、第一、これはとるに足りない童の世界の思ひ出だ……。

いまの雅子はどうかであらう？

昨夜以來かひがひしく自分をもてなしてくれる雅子。それはしかし、父のために負傷をした人に對する義務といつたやうな氣持からなのかもしれない。どうも

さうらしく思へる。さうでなくつて、あんな綺麗で聰明な女性が、おれのやうな……と考へると、進太郎にはどうもその観察が正しいやうに思へて、憂鬱であつた。しかし、彼はつぶやいた。

「よしよし、そんならそれでよい、おれは断じて忘れることにする。……失戀なんて、いやなこつた！」

進太郎は、ふと、佐世保時代の親友である武井久のことを思ひ出した。その友と、ある踊子との交渉を……。

「あんなのがほんとうの戀愛なのかもしれない、——しかし、おれはいやだ、失戀して泣くなんて、そんなてれくさいことが出来るものか。おれならヒョウヒョウと口笛でも吹いて忘れてしまふ。——第一、おれはオフクロの慈愛でどうなり大學を出、一年志願の兵役もすきましたが、まだ未就職者だ。これから職業を求めて世の中へ出なくちやならん、そしてお母さんの靈を慰めなくちやならんのだ。」

女の話どころぢやないや。——ねえ、お母さん！」

彼は最後の一言を聲に出してつぶやいた。くるりと寝がへりをして、部屋の右手に目をやつた。右手は窓で、窓ぎはにこの家の長男と次男の勉強机が置いてあつたが、その一つが臨時に進太郎のために提供されて、彼が三百里の海山を越えて捧持して来た父と母と同會の小さい位牌が安置され、母の寫眞も飾られてあつた。その母のことを思ふと胸が熱くなる。ちつとしておられなくなる。

「ばかな、のんきに寝てゐる段か！」

進太郎は急に苛立つて来て、とび起きようとした。が、すぐ、ウウム、ちくしやう、と呻いて顔をしかめた。殴られた向ふ脛がまだズキズキするのである。

「まアま、あわてるな、あわてるな」

彼はすぐ持前の悠容たる性格にかへつて、目をつむつた。

縁側に足音が近づいて来た。小母さんかな？ 雅子さんかな？ 小母さんにし

ては少し元気がよすぎる。それでは雅子さんだ、と思ふと、ひとりでに胸をどつて来た。なんてだらしない！と思ふと、われながら忌々しくなつたが……。

縁側の障子が開いた。

「進太郎さん、気分どう？」

小母さんでも雅子でもなく、次男坊の次夫であつた。

「やあ、君か、おかへり！」

なにかしらホツとしたやうな氣持と、同時に、なにかしらガツカリしたやうな氣持とを、チャンポンに感じながら、しかし氣さくに進太郎はその少年を迎へた。

「わるいね、君たちの勉強部屋を占領しちゃつて。——でも、なんだつたら君たち、こゝでやつても、ぼくの方はチツトもかまはないんだせ」

「なあに、いゝですよ、ぼくたち、玄關のわきの四疊半があるから。——そんなことより早く元氣になつて、ぼくたちとまた野球でもやつて下さいよ、ねえ、進

太郎さん」

なるほど、東京の子は愛想がいゝや、と微笑しながら、

「次夫君も工業だね、幾年生？」

と聞くと、

「ぼく、私立××工業の二年ですよ、兄さんと同じ府立の工業にはいりたかつたんだけれど」

××工業二年生は、肩にかけてゐたカバンを、くるりと前にまはして、進太郎の枕もとにあぐらをかいた。これがあの美しい姉さんの弟か、と思へるぐらゐ、をどけたやうな顔つきの、ぶんぐりとした少年であつたが、さつぱりして惡氣のないのが何よりだつた。進太郎のやうな茫洋とした男には、よい相棒でもあつた。

「すると君は頭では兄さんには敵はないな」

「ウン、だけど、兄さんだつて姉さんに比べたら大したことはないよ」

「へええ、姉さんはそんなに偉いかね」

「なにしろ、僕たち三人分の脳味噌を、あの姉さんが一人でもらつて、さきに生れちやつたんだからね、——お父さんだつてさういふんだよ」

「はッはッは。なるほど、それでは君たち姉さんに敵はないわけだ。——ちや、姉さん君たちにゐるだらう？」

「ゐばりやしないけど、あの姉さん、どつか凄いとこがあるよ、僕たち少くもお母さんよりは怒い氣がするね！」

「少くもお母さんよりはか、はッはッは」

この氣のおけない少年と、その美しい姉のことについて語ることは、なんとなく心たのしかつた。が、そのうちにまた足音が近づいて来て、前よりは静かに障子が開いた。眼鏡をかけた色の白い少年の顔がそこからのぞいた。

「何だ、次夫、お前こんなところで油を賣つてゐたのか、だめぢやないか、進太

郎さんのお邪魔をしちや！」

府立工業四年生の長男は、顔を見せるなり弟を叱りつけた。弟は頭をかきながら立ちあがつて、

「ちや、進太郎さん、またね！」

と、素直に出て行つた。

長男の一夫は母や姉に近い顔立の、しかしどこか神経質らしい少年であつた。

「進太郎さん、お氣分はどうですか。何か薬とりかなにかの御用があつたら、何でもいひつけて下さいね、僕たち行つて來ますから」

「ありがたう。ほんとに、みんなに親切にしていたゞいて……」

「なあに、そんなこと……。それより、ねえ、進太郎さん、あなたが元氣になられたら、ばく、いろいろ教へていたゞきたいことがあるんですよ、たとへば父のことなんかについてですが……」

「お父さんのことといふと……？」

「いゝえ、ぼく、個人としての父には大いに尊敬してゐるんですが、しかし、労働者たちが自分等の待遇改善を叫んで、それを会社に要求することが、どうしていけないのか、ぼく、それが……だつて父は……あ、いけない、いま進太郎さんはこんなこと考へない方がいゝんですね！　ごめんなさい、自分で弟を叱つておきながら……。ちや、御用があつたら、ほんとにいひつけて下さいね！」

一夫は、しづかに障子をしめ、しづかに去つて行つた。

みんな、なかなかよく黙つてあるな、と進太郎は感心した。

長男が十七、次男はまだ十五ぐらゐであらう。とすると、あの年頃のおれは一體どうであつたらう？　と、進太郎は考へてみた。

あの年頃のおれは、——どういたしましたして、あの年頃どころか、おれと來たら二十五の今だつて、挨拶はといへば、「やあ」とか「おゝ」とかいふばかりで、

とてもあんな氣のきいたことなどいへやしない。さういへば死んだオフクロがよくいつてたつて。

——なあ、進太郎、お前は竹を割つたやうな、えゝ氣性の男ぢやけれど、もうちつと人さまの前に出た時の挨拶ぐらゐ知つてをらんと、世の中に出てから困りませうで。

全く、そのとほりだ！

さう思ふと、進太郎は、だんだん心細くなつて來た。さういふ男のおれが、この東京で就職口をさがすなんて、そんなことが出来るかな？　だめだ、だめだ！　と彼は自分で思ひはじめた。するとまた持前の樂天的な性分が頭をもちやげて來た。

まあいゝや、大學は出て口にありつけるものは、やつとその三分の一しかないといはれる就職難の時代だ。その時はその時で前から考へてゐたやうに滿洲

へでも行かう。世界は廣いんだ。それにおれは今こそ父もなければ母もない、ひとりぼつちだ、どこへだつて行けらア。と一脈のわびしさをも伴ふた氣らかな思ひが一層その決心を助けた。とにもかくにも、くよくよするこたアないや……。

「進太郎さん、眠つてらつしやる？」

こんどこそ雅子の聲であつた。

「お邪魔してもよ、つて？」

「おかへんなさい！——さあさ、どうぞ、さつきから退屈してたところですよ」

進太郎の聲は、われにもなく弾んでゐた。

すーッと障子が開いた。

「おや、今日は……」

今日の雅子は制服ではなくて、母のしげ子をハラハラさせてゐる例の肩あげの跡だけが新しい、とき色の地に桐のしぼりの羽織に、紫矢絳の着物であつた。帯

だけは無精をして、黄いろいしぼりのしごきを無造作に巻きつけてゐた。さうした姿も進太郎には珍らしく、こちらの胸が切なくなるくらい、美しいものに見えた。……片手には濕布の道具をかゝへてゐる。

「……ちや、今日はもう早く歸つてたんですか」

「いゝえ、いま歸つたばかりよ。なぜ？」

「だつて着物が……」

「あゝ、これは歸つてすぐ着更へたのよ、だつて靴下が……、ねえ、男の方もさうなの？ 私たち、なにが氣持がいゝつて、學校から歸つて來て、さつさと靴下を脱ぐぐらの氣持のいゝことはないんだけれど」

「さあ、僕たち別にさう考へたことはないけれど……」

「ちや、私たちだけがさうなのかもしれないわね。——ところで、濕布どうします？ いますぐとりかへますか」

「どうも恐縮でね、實は、さつきも小母さんがさういつて来て下さったんだが……」

「母は駄目よ、ひとの怪我を見ただけでも顔いろが變つて、體がふるへてくるといふんだから、——氣が弱いからね！」

「優しいんですよ、家の亡くなつたオフロがよくさういつてゐた、室伏のおしげさんぐらの氣立の優しい人はないつて、——僕も好きだな、こゝの小母さんのやうな人」

「氣立の優しいことはね！ でも私はまた進太郎さんとこの小母さまのやうな、優しくつて、しかも、しつかりした方が好きだわ、——あゝさうさう、ねえ、進太郎さん、あなた、あなたのお母さまと家の母や父との、ええと、その三角關係、ごぞんじり？」

「三角關係？ へええ、そんなことがあつたのかな、——知らないな、僕は——」

「三角關係なんて、いやな言葉よ、むろんね。ほんとはそんな大袈裟なものぢやないのよ、たゞ、家の父は最初あなたのお母さまと一しよになりたかつたんですつて、ところが、小母さまは、あなたのお父さまと結婚なさつたので、家の父、すつかり悲觀してゐたんですつて、それに同情して母が……」

「ははあ、なるほど、——しかし、ほんとうかな」

「ほんとうよ、ちやんと母が自分で私にさういつたんだから、——母つたら平氣でそんなこと私に話すんですからね！ ほんとにをかしいの、家の母は。だつて母つたら、そりや父と仲がいのよ」

「だつて、そりや……」

「夫婦だからつていふんでせう、だけど、どこの御夫婦だつてあんな風なのかしら、二十年も一緒に暮して來てゐながら……」

「あんな風つて、どんな風なの？」

「そりやちよつといへないけど、——でも、家の母はね、なにもかも心底から父にすがりきつてゐるの。ですから、もしも父に萬一のことがあつたら、それこそ母は氣が狂ふか、あるひは、生きる甲斐性を失つて、朽木が倒れるやうに、ばつたりと、そのまゝ參つてしまふんぢやないかつて、そんな氣がするの。私たちが子供にしてみれば、そのところが實に心配なんだけれど——」

「しかし、いゝなア、そんなのは！ 美しいよ、それこそ典型的な日本の女なんだ」

「へええ、進太郎さんはそんな古風な女の人がお好き？ やあねえ。あの小母さまの息子らしくもないわ」

「そりやどういふ意味だか知らないけれど、ぼくんちのオフクロ、古風だといふ意味でならば、あへてこゝの小母さんにもヒケをとらない方だつたと思ふがな」

「いゝえ、古風であつたかなかつたか、それをいふんぢやないのよ、私は。——」

めんだうね、この説明は！ ——でも、とにかく、いゝ小母さまだつたわ、どうしてもう少し長生きをして下さらなかつたのでせう、ほんとに残念ね！」

「そりや僕も残念は残念でならないんだけど、——でも仕方がない」

「ええ、そりやね！ ——でもね、進太郎さん、私、もしも小母さまが生きてゐて下されば、こんどの夏休みあたり一度お訪ねしてみたいと思つてゐたのよ、小さい時お世話になつたきり、一度もお逢ひしてゐないんですから」

「その頃のこと、おぼえてゐますか」

「ええ、かすかに」

「思ひ出すことある？」

「ときどき……」

「たとへば、どんなことを？」

「さうね、小母さまにお風呂に入れていたゞいて、お風呂の中でお蜜柑いたゞい

たことだとか、それから、進太郎お兄ちゃんのお供をして、トンボを捕りに行つたことだとか……」

「いや、そりや違ふ！　ぼくがお供をさせたんぢやなくて、あんたが度々ぼくにお供をさせたんだ！」

「ホ、。あるひはね！」

雅子はおほらかに笑つた。

進太郎も笑ひながら、——この分だと、この女に結婚を申込むことも、あながち不可能なことではないかもしれんぞ、と思つた。そして心の中でつぶやいた。

——就職だ、就職だ、まづ口を見つけなくツちや！

さう思ふと急に元氣が出てきて、氣持が明るくなつた。

戸外は夕やけ。

ありがたいことに、明日もどうやらお天気らしい……。

奇妙な役割

四日目は日曜日、どつちみち、これは休まうといふので、いちんち臥て過したが、五日目の月曜日からは少しぐらゐ無理をしても起きあがらうと思つてゐた進太郎が、あたりの静かさに誘はれて、またひとしきり、ぐつすと眠つてしまつた。

月島の工場にかよふ陽三は、朝も早く、六時すぎには家を出る。七時になると次男の次夫が、麻布の××工業学校へ出てゆく。學校が住居と同じ區にある雅子と、となりの區にある一夫は、もう少し遅く前後して出かける。最後に近くの小學校にかよふ光子、これだつてもう尋常四年生であるが、末ツ子のせゐか、なんだかんだと母親に世話を焼かせた末、ワアワアとあわてまくつて出てゆく。

みんなが出てゆくまでは、家の中は相當にさうざうしい。そのかはり出て行つてしまふと、あとはひっそりかんと静かになる。その静かさが進太郎を、ついで、うとうととまた眠らせてしまつたのである。

目がさめてみると、縁側の障子にあかあかと日がさし、庭の木立では小鳥が陽気に鳴いてゐた。

「よく眠る男だな、まつたく、われながら感心だ」

などと、ひとりごとをいひながら、部屋の隅においてある例の大型トランクから、上下そろひの久留米緋をひき出すと、手早くそれに着更へ、洗面道具をもつて縁に出た。十坪とはなささうな狭い庭は、しかし、わりにいゝ趣味に立木や石が配置され、草花が植ゑてあつた。チューリップとアネモネの花が咲いてゐる。生垣の近くの櫻は吉野らしく、花はもうほとんど散つて、やはらかい若葉が伸びかけてゐる。この庭をかこんで離れから座敷と茶の間にかけてカギの手につゞく

わりに長い縁を、負傷後の足だめしのつもりで、ゆつくりと歩いて、茶の間へ行つた。誰もゐない。茶の間から臺所に出て、湯殿に行き、念入りに顔を洗つた。

佐世保以來のアカを今日はじめて自分の両手で洗ひおとす氣持であつた。

「さあ、いよいよ今日から就職戦線を駆けめぐらんだぞ！」

そんな氣持であつた。

さうして再び茶の間に戻ると、ちやうどそこへ、しげ子も、茶の道具をかゝへて、座敷から出て来た。

「やあ、小母さん、ぼく、すつかり寝坊しちやひましたよ、——おや、お客さまだつたんですか」

「ええ、永瀬さんのね、奥さんが……」

「へええ、たいへんですね、朝ッから」

「ほんとに朝ッからだわ、でも、朝からでも夜からでも……さささまとしては……」

いそいでらつしやるわけだらうから……」

おとの方は、どうやら、ひとりごとのやうであつた。

進太郎は、べつに氣にもとめず、そのまゝ火鉢の横にすわつて、そこにおいて、あつた朝の新聞を、疊の上にひろげた。

「進ちゃん」

小母……しげ子が、こんどは臺所から話しかけた。

「實は今ね、雅子に縁談がもちあがつてゐるのよ、それもあんまり悪くはなささうなお話が……」

「縁談？ 雅子さんに……？」

進太郎は、ぎくりとしたやうに新聞から目をはなした。臺所の方を見た。

それには答へないで、しげ子は、すぐ、きうすだけを持って茶の間に戻り、火鉢の向ふ側に中腰にすわつて、茶ダンスから湯呑をとり出すと、

「さあ、まア、お茶でも……」

と、進太郎にすゝめた。

「すみません。——しかし、その雅子さんのお話は……？」

進太郎にしてみれば、お茶どころではなかつた。露骨すぎるぐらゐ、まじまじと相手の顔を見た。しかし、しげ子は落着いてゐた。

「それより、進ちゃん、あんた、ほんとにもう起きても大丈夫なの？」

「大丈夫ですとも、ほんととは昨日からだつて起きてゐてよかつたんです」

「なら、いゝけど、——ちや、進ちゃんにも聞いてもらひませうね、どうせあなたが元氣になれば、ゆつくり話して、あなたからも雅子に意見していた、かうと思つてゐたところなんだから……」

「といふと、雅子さんは……その縁談について……どういふんですか、けつきよく？ 乗氣なんですか、それとも……」

「ええ、それがね、そんなに乗氣だといふほどでもないんだけど、さうかといつて、そんなにイヤだといふのでもなさうなの、結婚するとすれば申分のないよいお相手だなんて、自分でもさういつてるくらゐなんですから……」

「ぢや、けつきよく、結婚するつもりではあるわけですね？」

「ところが、永瀬さんに對してはおことはりしてくれなんていつてるのよ」

「はつきりですか」

「ええ、まあね」

「ぢや、しやうがないですね、かたんちやありませんか」

「さうかたんに行くもんですか、こんな一生の問題が……」

「なるほど、一生の問題は問題でせうが、——しかし、どうも僕にもわからないな、そこんところが、——その雅子さんのイヤでもオウでもないといふ、そこんところが」

「いゝえ、それはわかるのよ、はつきりしてるの」

「といふと、つまり、どうなるんです？」

「つまり、雅子は、ほら、こんど女子醫專に入つたばかりでせう。ねッ？ けどまんざらバカな娘でもないんだから、どうせ女が一度は結婚しなければならぬといふことは知つてもあるし、また、結婚は一生しないなんてバカな考へをもつてゐるわけでも毛頭ないの、だけど、たゞ……」

「あッさうか、なるほど！」

「ねッ？ ——で、そこんところを私はあなたに聞きたいんだけど、ねえ、どう思ふ、進ちゃんは？」

「どう思ふつたつて、僕はまだ、そのマアちゃんに求婚してゐるといふ相手の男を、根ッから知らないんだから……」

「さうさう、それがかんちゃんね！ ホ、。いつでも私の話はこれだから、——」

だからよくお父さんにも雅子にも叱られるのよ、ホ、」

「ま、いゝですよ、で、どんな男なんです、その相手は？」

「牧野重人といふ方、ごぞんじ？ 法學博士とかで、有名な辯護士さんよ」

「名前ぐらの聞いてるやうな気がしますね」

「この小父さんが出てゐる×××造船所の顧問辯護士なんかもしてゐる方で、新聞なんかにも時々お寫眞が出るやうな方よ」

「新聞にはこの小父さんの寫眞だつて出ることがあるでせうが、——ぢや、その人ですか」

「いゝえ、まさか、その方が……。その方の實は御次男よ、御次男だから私としては氣が動いてるんだけど、——だつて、さういふお立派な御家庭にネ、うちのやうな職工ふせいの娘が、お嫁に行つたんでは、——ねえ？ だけど、その方は御次男だから結婚をなさると、分家をして、べつに世帯をもち、しかも立派に

獨り立ちがお出来になるやうになるまでは、その親御さまが……」

「いや、その親御さまはよいとして、常人は何者なんです、なにをする人なんです？ やつぱり法學士で辯護士ですか」

「それが理學士なのよ、たいへんな御秀才ださうでね、いまは大學の研究室にゐられるんださうだけど、今年のうちにはヨーロッパにネ、研究かたがたいらつしやるんだつて、それで話も急いでゐられるわけなの、といふのが、お父さまの御意見でね、若いものが洋行するのには、どうしても細君も一しよの方がよいといふので……」

「さうなると、マアちゃんも洋行が出来るわけですね？」

「本人が御辭退しなければね」

「——で、その男は、その秀才の理學士は、人物はどうなんです？」

「立派な方らしいわ、それも仲人さんの口だけでは信用されないかもしれないけ

ど、お父さんがそれは認めてなさるんだから」

「ちや、小父さんは知つてゐるんですね、その男を？」

「ええ、その方が小父さんの工場に見學にいらしたことがあるんだつて、その時ちやうど小父さんが案内役をつとめたもんで……」

「なるほど、——で、小父さんは、どうなんです、その縁談について？」

「小父さんはあゝいふ人だから、私とはまた違つた深い考へがあるのでせうが、でも、氣が動いてゐることは同じなの」

「それはさうでせうね、しかし、もうひとつ聞きますが、その男、健康はどうなんです、丈夫ですか」

「そりや進ちやんほど頑丈ぢやないかもしれなけれど——」

「人並には健康なんですか？ それもよしと、——血統は？」

「それは確なの」

「フーム、さうなると、なにもかもよいことづくめぢやないですか。にやけたやうなところは……あゝ、これは大丈夫だらう、研究室にとちこもつてコツコツやつてるやうな人なら。——すると、ほかにはもうありませんか、氣になるやうなことは」

「氣になるとすれば、御身分がね、こちらはさつきもいふとほり職工……」

「お止しなさいッ。職工ふせいなんておつしやるけれども、こゝの小父さんはたゞの職工ぢやありませんよ。よしんば、たゞの職工だとしてもそれが何ですか？

ばかな！」

「ええ、それはね」

「それより、その野郎、男前はとうです、好男子ですか」

「さあ、それはどうでせうね、ホ、ホ、」

「ホ、ちやないですよ、こつちがあのとほり、人並すぐれて綺麗な人なんだか

ら、相手だつて少くとも十人並でなくつちや」

「ぢや、それも十人並つてことにしておきませう」

「とすると、——やれ、やれ、どこをどう突いてみても勝目はないや、ちくしやうめ」

「いやね、なにいつてんの、進ちやん」

「はッはッは。實はね、小母さん、白状しますが、ぼく就職口でもきまつたら、うんと小母さんのごきげんをとつて、マアちやんを僕のお嫁さんにもらはうかと思つてゐたんですよ。マアちやんなら死んだ家のオフクロだつて、氣に入つてゐましたから。——でも、その法學士の、いや、理學士の秀才といふ野郎は、どう考へても僕よりは、うんとえらい奴らしいですから、残念ながら、ぼく、あきらめますよ、その點どうぞ安心して下さい」

「ホ、。進ちやん、なにをいふのよ、そりや進ちやんは私たちも大好きよ、氣

兼ねはいらないし……。でも、あなたは雅子や一夫たちのお兄さんぢやないの、私たちもそのつもりで、たよりにしてゐるんだし、雅子だつてそのつもりであるのよ」

「わかりましたよ、どうも心細い兄貴分で、恥かしいんですが、まア大いに努力することにしませう。——そこで僕の意見ですが、僕もこの縁談には大いに賛成です。雅子君が勉強したいといふ氣持はわかるし、それは大いに尊敬していただきますが、しかし、女のたいせつな結婚を犠牲にしてまで、いまのまゝのやり方で勉強するのは、どうかと思ひます。つまり、女の勉強の仕方には、ほかの方法や、ほかの道があるんぢやないかといふ風に思ふんです。ぼくは元來が平凡な男で、平凡な常識論のほかには、特別な思想なんてもも持たないんですから、マアちやんがこの常識論に反對して、理窟をこねだしたら、ぼくにはとても、それをいひ負かす自信はないですが、——しかし、小母さんが母親の慈愛と、それか

ら、ええと、母親の子に對する本能……とでもいひますか、さうした立場から選んだこの縁談は、決してまちがつてはゐないと思ふんです。小母さん、しつかりしなくちや駄目です」

小母さんのしげ子は、ふだん口不調法な青年の妙に興奮したやうな雄辯を、いささか呆れぎみに聞いてゐた。そして、その不思議な真剣さから、さつき彼がいつた雅子をお嫁にもらふつもりであつたといふ冗談を、あるひは冗談ばかりでなく、いくらかはほんとにそんな氣持であつたのではあるまいかと、多少それが不安な心にもなつた。しかし、それにもか、はらず、彼が誠意をもつてこの縁談に賛成してくれてゐること、殊に、勉強よりは結婚がもつとたいせつだといふ自分の日頃の意見に賛成してくれたことを、とても嬉しく心づよく思つた。

「ありがたうよ、進ちやん、私もそつくり進ちやんと同じ考へよ。——でね、進ちやん、お願ひですから、あなたからもよく雅子にいひ聞かせて頂戴ね、あんな

負けすぎらひの娘だけど、あなたなんかのいふことには案外よく耳を傾けるんぢやないかと思ふから。そこにゆくと私のいふことなんか、てんで……」

氣のいゝしげ子は、目尻に涙さへにじませてゐた。

「でもね、進ちやん、考へると、私、ほんとに心細いのよ、うちなんかこれで、ありがたいことに、その日のくらしに困るといふやうなところないけれど、でも、お父さんがあゝいふ主義の人で、敵が多いうへに、子供は四人もゐるんだし……」

「小母さん、わかりましたよ、——でも、だめだな、小母さん、小母さんは僕の母とは四つちがひだといふから、まだやつと四十二ちやないですか、いまからそんな、おばあちやんみたいな氣持であちや、だめだな。しつかりなさい！ 子供が四人もゐるといふけど、その四人が四人とも、みんな、出來のよい、伶俐な子ばかりぢやないですか。小父さんには敵が多いといふけれど、同時に味方も多い

んだから……。そこにゆくと亡くなつた僕の母なんかは……」

「さうね、ほんとにお品さんは……」

「さうですよ、だから僕もその母の靈をなぐさめるために、——さうだ、もう、ぐづぐづしてはゐられない。——ちや、小母さん、ぼく、これから行つて來ますよ」

「あら、どちらへ？」

「もちろん、口をさがしにですよ、就職運動です。ほんとは東京についた翌日すぐ行かなけりやならなかつたところなんだから、早くしないと、ふさがつてしまひます」

「でも足の方は……？」

「大丈夫ですよ、もうかうなりや四つンばひになつてでも出かけなくちや。はッはッは」

進太郎は、やがて背廣に着更て雅子の家を出た。

おもひきつて手を伸ばしさへすれば、案外わけなく手に入りさうにも見えた世にも美しい小鳥が、あツといふまに、もう自分なんか、どんなにヂタバタしても、ととても追ツつきさうにもない遠いところへ、ひらりと飛んで行つてしまつた……。

進太郎には、そんな風にしか思へなかつた。

自分がお嫁さんにもらふつもりであつた娘に對して、とたんにこんどは、まるで自分が知らないよその男と、早く結婚しろ、と忠告しなくてはならぬ立場に立たされたのだ。奇妙な役割がまはつて來たものだ。

——とんだことになりやがつた！

胸の奥の方ではズキズキと痛むものを感じないではなかつたが、彼はアゴをさすつてニヤニヤ笑つた。ニヤニヤ笑ひながら、大森ゆきのバスを待つた。

——おれはお人よしだなア、死んだオフロクロがいつてたとほりだ。

彼はさうも思つた。さう思ふと、なんだかそこらでゲラゲラ笑つてゐる人があつた。うに思へる。しかし、と彼は考へた。——まア、笑ふ人には笑はしておくしかあつるまい。おれがあつたマア公を好きだつてことは、これはもう、ごまくわしやうのない事實で、もはやおれの弱味みたいなものだ。それから、その理學士の秀才野郎といふのが、どこをどう叩いてみても、おれより優れてゐるさうなことは、これまた、もはや疑ふ餘地はなささうに思へる。とすれば、おれとしては甚だ遺憾なことではあるが、こゝは黙つてひきさがらばあるまい。それが愛するマア公に對する、おれの誠意ではあるまいか。そして、それがおれとしての男らしい道でもあるまいか。——さうだ、おふくろは、おれに常に誠實であれと教へた。男らしくあれと説いた……。

バスはなかなかやつて來なかつた。彼は足もとの小石を力まかせにポンと蹴飛ばしてやつた。

いたづらがき

五時間目の體操を最後に、月曜日の課業をすますと、雅子は、みんながおしやべりをしながら、ぐづぐづしてゐるあひだに、自分は手ばやく體操服を制服に着更へて、だれよりも早く學校を出た。

校門を出て通りを右の方へ四五十歩もゆくと、道は丁字路になり、大森驛ゆきのバスの停留場——帝國女子醫專前がある。大森驛まで十五分とはかゝらない。そこでバスを降りて八景坂の方に出ると、ふだんは運動かたがた家まで歩き、いそぐ時にだけまた荏原町驛ゆきのバスに乗ることにしてゐたが、今日はそのバスに乗つた。馬込東一丁目の停留場まで、ホンの十分たらず。そこから家まで、歩

いて、これも五分か、六分。……三時前にはもう家につくことができた。

「たい今！」と裏口からはいつて、茶の間をのぞくと、母はゐなくて、妹の光子がチャップ臺によりかゝり、おやつビスケットをポリポリやりながら、ひとりで雑誌の拾ひ読みをしてゐた。

「あ、お姉さん！ おかへんなさい！ お母さんお使ひよ、私、お留守番してんの」

光子は問はれないさきに答へてのけて、ついでに自分が無意味に遊んでゐるのではないことも、はつきりさせた。

「あゝさう、お買物ね？」と、うなづきながら、すぐと二階の自分の部屋に上つた。窓ぎはの花林の机の上に、さげてゐた緑いろの革の手提カバンをおくと、その上に、ふさのついた角帽をぬいで、両手で頭髪をなでつけながら、さうだ、今日はまだ早いんだし、髪でも洗はうかな、と考へてみた。が、トントンとまた階

段をおりると、湯殿の方へは行かず、座敷から縁に出て、離れをのぞきに行つた。

「進太郎さん」

と、小さく、障子の外から呼んだが、答はなかつた。

「進太郎さん！」

もう一度、こんどは前より大きく聲をかけて、障子のガラスごしに中をのぞいてみた。進太郎の姿は見えず、部屋の隅の大きなトランクと、その上に案外お行儀よく脱いでたゝんである久留米緋だけが目についた。

「さては進太郎氏もお出ましかな、——すると足の方ももうすつかりよくなつたのね、よかつたわ」

さう思ひながら、なんとなくそのことに、ちよつと物足りないやうなものを感ぜないでもなかつた。しかし、それはまだ自分でさうと意識し、吟味してみないではゐられないほど、はつきりしたものでなかつたので、

「さて、それではミイ子を相手にお茶でも飲んで——」
と、また茶の間へひきかへした。

ミイ子……光子はゐなくて、母が歸つてきてゐた。

「あら、歸つてらしたの？」

「おや、早かつたのね！」

それを二人は同時にいつた。が、すぐに母の方があとをつづけた。

「ちやうどよかつた、實はね、マアちやん、今日また永瀬さんの奥さんがいらして……」

「また？」

「またつて、あんた、そんな……。さきさまだつて冗談や酔興すゐきやうでいらつしやるわけぢやないんだから……」

「だつて……」

「ちや、お前ダンゼンおことはりするつもりなの？」

「いやよ、お母さん、ダンゼンなんて、お母さんらしくないわ」

「お母さんの言葉とがめなんかするよりも、——ちや、あんたこそ、あんたらしく、はつきりしやんとしたらいゝぢやないの？」

「だから、私、最初から、はつきりしやんと……」

「おことはりしたといふのかい、ねッ、さうかい、——さうなのね？」

「お母さん！」

雅子は、すがりつくやうに母の顔を見た。が、すぐにその目をそらして、うつむいたまゝ、疊たたみのへりをむしつた。

「ごめん下さいませ」

しづかに玄關の格子かかしがあいて、しとやかな女の聲がした。若い女の聲であつた。母と娘は顔を見あはせた。そして雅子が立ちあがつた。

「あら、いらつしやい！　まア、どうして……？」

女學生流の氣さくな應對であつた。たつた今「お母さん！」と思ひあまつたやうな顔つきで母を見あげた雅子の聲ではなかつた。母のしげ子は耳をすました。相手の聲も聞えたが、言葉の意味はよくわからず、それが誰であるかもすぐには見當がつかなかつた。が、どうせ遠慮のない學校のお友達がなかだらうと思ひながら、玄關からすぐに上れるやうになつてゐる二階への階段を、ミシミシと上つてゆく二人の足音を聞いてゐた。その足音が二階に消えたかと思ふと、すぐにまた、トントンと元氣よく下りてくる音がして、

「お母さん、須藤さんよ、須藤喜代子さん！」

と、雅子がつたへに來た。

「おぼえてらつしやる。ほら、女學校時代に私より一級うへで、いまも同じ學校の藥學科の方にいらつしやる——」

「あゝ、あの高輪かどつかの大きなお藥屋さんの一人娘さんだとかいふ、あの綺麗なお嬢さん？」

「ええ、ええ、その須藤さんよ。ほら、おみやげですつて」

雅子はさういつて、大森かどつかのデパートの包紙にくるまれた花束を母の方にさし出し、チャブ臺の上においた。

「それからね、お母さん、須藤さん小母さまにごあいさつしてからでないと悪いといふのを、二階へおし上げたんですから、あとでちよつとお顔を出して下さいね！　それから、お紅茶かなんか……」

「ええ、そりやいけど、——でも、なんにも氣のきいたお茶うけがなくてねえ」

「そんなもの氣にすることないわ、——とにかく、ちや、願ひしますよ、お母さん」

いひすて、雅子はまた、トントンと二階へ上つて行つた。

「まアま、あの足音……」

母は眉をひそめながら、紅茶の支度にかゝつた。

須藤喜代子は、これも學校の歸り途らしく制服姿で、きちんとすわつた座布團の横に、あづき色の革の手提カバンをおいてゐた。藥學科の二年で、醫學科一年の雅子よりは年も一つは上だつたが、いかにもしなやかな、小柄の、きやしやな體のつくりは、かへつて雅子よりは一つぐらゐ若く見えた。……若くといふよりは、むしろ、幼くといひたいくらいのである。その色白の、すこしもけんといふもの見えな、まる顔や、よくとほる甘ツたるい聲のものいひ方などが、一層さういふ風に感せさせるのかもしれない。雅子が上つてゆくと、——それが癖になつてゐるらしく、體をくねらせるやうにして、

「室伏さん、ほんとにおかまひにならないでね！ でないと、あたし……」

と、喜代子は細い眉をひそめて見せた。

「ええ、おかまひはしたくても出来ないんだけれど、——でも、ほんとにどうした風の吹きまはしといふの、いまごろ急に……？」

雅子は自分の机の横に、喜代子と向ひあひにすわつた。

「いゝえ、急にぢやないのよ、ほんとといふと、あたし、一昨日からお伺ひしようかと思つてゐたの」

「ぢや、なにか御用でも……？」

「ええ、ちよつとね、でも、さう改まつて聞かれると、困つちやうなだけで、——でも、どうせお話しして、あなたの御意見を伺はしていたゞかうと思つて上つたんですから、お話ししますわ」

「たいへんなことらしいのね」

「ええ、たいへんなのよ、私としては。とても迷つちやつてるの。——實は結婚

の問題なんだけれど」

「あゝ」

雅子は、コクンコクンと二三度、つゞけざまに、うなづいて見せた。喜代子が何のために自分をたづねて来たか、もう聞かないでもその意味がわかるやうな気がしたのである。

「でも、そんな大きな問題を伺つて、私の意見なんかがお役に立つかしら？」

「立ちますわ、あたし、とても迷つちやつてるんだから」

「……」

「お医者さんなの、いまはまださうでないけれど、将来は、おそらく博士にもなれさうな人なの。なれなくつたつてかまやしないけれど——」

「すてきね！ 理想的ぢやないの、須藤さんには！」

「どうして？」

「だつて、旦那さまがお医者さまで、奥さまのあなたが薬學士で、お家は世間にも知られた江戸時代からのお薬屋さん！ まるで三拍子そろつてるぢやありませんか」

「ところが、うまくその三拍子がそろつてくれないから困るのよ」

「どうして？」

「あちらがお医者さま……といつても、まだ自分で開業なんかしてゐるんぢやなくて、病院勤めなんだけれど、とにかくお医者さまにはちがひないので、そのことには父も母も大乘氣なの、もともと女の私をあんな學校に入れたのも、將來お嬢さんをもらふ場合、その人が薬屋の出来る人なら問題はないけど、さうでなかつた場合には、私にそれが出来たら都合がよからうといふので、入れたんですからね！」

「ええ、ですから、お医者さまだつたら……」

「ええ、さうなの、だから、それには今もいふとほり父も母も賛成だし、私もいふと思ふの。それに都合よく向ふは次男坊で、よその家の跡をついでつげないこともない立場の人ですから……」

「それで、そのどこが問題なの？」

「その人がね、あたしと結婚するのはイヤではないけれど、養子にくるのはイヤだといふのよ」

「……」

「つまり、あたしの家がお金持だからつて、その人はいふの、あたしんちの財産なんて知れたもんですのにね！」

「でも、そんな方、たのもしいちやない、いまどき？」

「ええさうよ、たのもしいことはたのもしいつて、あたしもさう思ふわ、でも、養子にきてくれなげや、お話にならないのよ、あたしは一人娘だし……」

「なるほど、そこが問題なのね！」

「いゝえ、まだあるのよ、あなたはさつき薬學士とおつしやつたわね？　ところが、あたしがその薬學士になるには、すくなくも今の學校を卒業しなげりやならないでせう？　——まだあと三年よ、今學年は入れないで、入れたら四年よ」

「たつた三年や四年ぐらゐ、向ふの方に待つていた、いたら、ちやないの？　もしあなたを愛してらつしやるんだつたら、さうなさるのがほんたうよ。私、さう思ふわ、もしかりに私にも愛する人があるとして、なにかの事情で、すぐ結婚が出来ない場合があるとしたら、私、三年四年どころか、五年だつて十年だつておとなしく待つてゐるわ」

「ええ、そりや私たちはさうだけれど……」

「私たちがさうなら男の方だつてさうであつてい、ちやないの？　私、女にも男と同じ仕事をさせろだとか、権利をあたへよとか、そんなことは考へたこともな

いし、考へようとも思つてないけど、でも、結婚は男と女とのあひだのことよ、で、さうだとすれば、女に辛抱のできることは、男の人にだつて辛抱してもらつてい、と思ふんだけれど、ちがふかしら？」

「でもね、室伏さん、私の場合、あちらは御両親も私の方よりは、うんとお年を召してらして、その方が早く結婚なさることを、とても望んでらつじやるらしいのよ。それでお國のはうでも、いくつかお話もあつて、しきりにせき立てゝゐられるらしいの。おまけに、ほかにも何かお仕事の都合で結婚をおいそぎにならない御事情もあるやうだし……」

「ええ、そのへんの御事情は、むろん、私にはわかりませんわ。けれど、もしさうだつたら……」

「さうだつたら……？　ねえ、あなただつたら、さういふ場合、どうなさつて？」

「私だつたらつて、私、そんな假定でものはいへないわ」

「なら、あたしはどうしたらいいでせう？」

「結婚なさるのね」

「でも、それが……」

「出来なければおよしになるのよ、その二つしかないと思ふわ」

「さうね」と、うなづいてから、きふに喜代子は雅子の顔をにらんで見せた。

「やだわ、ひどい方！　その二つよりないことは、はじめツからわかつてるぢやありませんか！　あなたは聰明な方だとか理智的な方だとかいつて、女學校時代からもてはやされてらしたけれど、ほんとにさうなのね！　あたし、そんなきまりきつたことを伺ふために、わざわざ伺つたわけぢやありませんわ」

「そんなことおつしやつたつて、——私、これで眞面目にお答へしたつもりなのよ」

「でも、あたしとしては、エースとかノーかのどつちかを、はつきり答へていた

「きたかったのよ」

「だから、私、はつきりお答へしたつもりなだけけれど——」

「……結婚しろとおつしやるのね？」

「ええ、あなたがその方を愛してらして、そして、その結婚をいそがなければならぬといふ、その方の御事情が、もし絶対的なものであるとしたらばよ」

「絶対的なものかどうか、そこまではわからないけど、今年中にその人が誰かと結婚なさることは確實よ、もしもあたしが……」

「それであなたは平氣なの？」

「いゝえ、あたし……」

さういひかけて、喜代子は、あわてて横を向き、うつむいてしまった。われにもなく涙がこみ上げて来ようとしたからである。雅子は、むしろ、キョトンとしてそれを見てゐた。が、親身な調子で答へた。

「結婚なさるのよ、ねッ？」

「学校もなにも止して？」

喜代子は横を向いたま、たづねた。その聲は鼻白んでゐた。

「むろんよ、——だって女の學問と結婚とが兩立しないとすれば仕方ないぢやありませんか、私、さつき結婚は男と女との……といひましたけれど、それは愛情のことをいつたので、生活や仕事の問題となると、これはまたべつよ、男の仕事が單に家庭だけではなく、國家や社會とつながるものである以上、私たち、それを認め尊重して……なあんて、これは私の父の説のうけ賣りなだけけれど——」

「いゝえ、でも、それほんとうね！」

とたんに、喜代子の聲は、はればれとしたものになつた。

「あたしがあの學校にはいつたのはね、室伏さん、さつきもいつたやうな理由からだつただけけれど、でも、ほんとうのところは、あたし、自分でそんなにさき

ざきのことまで深く考へてゐたわけではなく、勉強はこれで嫌ひな方ではなかつたし、ずつと成績もそんなに悪くはなかつたので、あの學校がなかなか入學が困難だと聞いたもんだから、ぢや、ひとつ、自分の力だめしをやつてみよう、なんて、いへば選手が仕合に出るみたいな氣持で、入學試験をうけてみたのだともいへると思ふの、いま考へるとね！」

「ええ、それは……」と、うなづいて、雅子はくすりと笑つた。女子醫專入學の動機には自分にもそんな氣持がなかつたとはいへない、と思つたからである。

「でね、あたし、とにかく入學はしても、いやになつたら、いつでも止めようぐらゐの氣持だつたの、最初は。ところが、はいつてみると、——あなたがた醫學科の方は一層さうだらうと思ふけれど、あたしたちの學校、ほとんど大部分が地方の方でせう？　そして、ほとんどみんなが、地方のお金持や家柄のお嬢さんたちね？　さういふ人たちが、わざわざ親もとをはなれて、東京に出てきて、四年

も五年も勉強なさるのは、それ相當にみんな理由があるのね！　だから、女の身で學問をし、技術を身につけるには、どんなに障害が多いかといふことも、また、たとへば結婚にしても、うんと人よりは遅れるといふやうなことも、もうちやんと覺悟の前でやつてらつしやるのね！　だから、みんな眞劍なのよ、お嫁入りまでの退屈さまに學問をするんだ、なんて、そんなのん氣な氣持でゐるやうな人は一人もゐないわ」

「ええ、それはほんとうね！」

「それで、あたしなんか、いつのまにかさうしたまはりの空氣にひきつけられて、いまでは勉強といふことに、これで眞面目な氣持もあれば、執着も持つてゐるのよ」

「ええ、ええ、わかるわ」

ちよつと話がとだえた。喜代子は膝の上に手を組んで、おや指とおや指を、た

がひにくるくるとまはらせてゐた。雅子は顔だけを横に向けて、指さきで机の上
にいたづら書きをしてゐた。なんの気なしにやつてゐたのであつたが、そのロー
マ字のいたづら書きが、いつのまにか、高木進太郎となつたり、牧野信正となつ
たりしてゐるのに、自分で気がつくとは、はッとして手をひつこめ、きつぱりとし
た調子で喜代子にいつた。

「ねえ、須藤さん、學問といつても、けつきよく、私たち女の場合には、その限
度が知れてゐるんぢやないかしら？ そりや近頃では女の醫學博士が出たり、辯
護士が出たりして、それは私たち女性にとつて心づよいことだとは思ふけれど、
でもそれはホンの選ばれた少數の人に許されることで、みんながみんな、さうな
れるわけでもないし、またなる必要もないことだと思ふの。——ねえ、やつぱり
結婚なさるのよ、さうなさいよ」

けつきよく、この女は私にかういはせるために來たのだ、と雅子は最初から考

へてゐた。そして、それに對しては、いくらか冷淡な皮肉な氣持をもつてゐた。
けれど、いまはさうでなく、熱意をもつてそれをすゝめた。それは現に自分にも
今おこりかけてゐる結婚の問題に對して、自分の意見をはつきりさせる氣持でも
あつた。といつて、それでは雅子は母がその成就を望んでゐる縁談に對して、母
の希望に従ふ氣になつてゐるのかといふに、それはまた違つた氣持であつた。雅
子は母がその縁談に乗氣になつてゐることに對して、決してそれを無理だとは思
はなかつた。母の立場から見れば、もつともなこともかもしれないと思つてゐた。
ニべなくそれを斥ける十分の理由はなささうであつた。それでゐて雅子は、その
縁談について、まだ切實に考へる氣持にはなれないでゐた。イヤとかオウとかい
ふのではなく、もうしばらく自分をこのまゝ、そつとしておいてほしい、そんな氣
持であつた。それを人がわがまゝだといふならば、それも仕方のないことだと思
ひ、そのこんぐらかつた氣持が、友人に對しては、はつきりと結婚なさいとす、

める氣にもなつたのであつた。

そんなまはりくどい心の動きが、相手に通じようはずはなかつた。

「ありがたう、室伏さん、けつきよく、あたしもさうするよりほかはないと思つてはゐたの。でも、あなたの御意見を伺つて、あたし、なんだか心がシャンとなつたやうな氣がするわ」

喜代子は無邪氣に喜んで、やがて歸つて行つた。雅子はそれを東一丁目のバスの停留場まで送つて行つた。

こゝにも惱める子

須藤喜代子に乗せた大森驛ゆきのバスが、向ふの角をまがるまで、雅子は、その道ばたの停留場にたゞすんでゐた。そしてバスが見えなくなると、ふツと、な

んともいへないわびしい氣持と、なんとなく割りきれないモヤモヤとした氣持とが胸にせまつて來た。むろん、友達が去つたからではない。その友達がもつてきた問題がさうさせるのである。

けれども、自分のさうした氣持について、べつに深く考へてみようとはせず、かぶりを振つて、そのまゝ歸りかけようとする。

「あの、ちよつとおたづねしますが……」

若々しい女の聲でよびとめられた。

ふりかへつてみると、はでな洋装の若い美しい人であつた。

「このへんに室伏さんとおつしやるお家があるはずですが、——ごぞんじありませんか？」

「室伏……なんとおつしやるんでせうか」

「室伏……たしか陽三……」

「あゝそれだと、私の家なんですけれど——」

「あら！」

まろくよく光る目を一層まるくし、眞赤にベニを塗つた唇を、ほう！ といふやうな形にして、その女は大仰な表情をして見せた。そして、いかにもなれなれしく、

「ぢや、あなたが、あの高木進太郎さんのイトコさんとかおつしやる方ね！ ねッ、さうでせう？ 進太郎さん、もうお家に歸つてらして？」

「いゝえ、まだ……」

「あら、まだ？ ぢや、さつきのまゝまだお歸りにならないのね？ へええ、ぢや、あの九州男兒、あれからあの人達と一しよに、きつと銀座裏あたりで……」

さういひかけて、すぐ、

「ぢや、どうせお待ちしてみても、いつ歸つてらつしやるか、わかりやしないわ

ね？ いゝわ、ぢや、お歸りになつたら、さうおつしやつて下さいな、あたしが
おたづねして来たつて。あッさうさう、あたし、大木美鳥。大木は大きい木、ミ
ドリは美しい鳥、ねッ、さういつて下さればわかるわ。それから、あたし、北海
道の巡業から歸つてきたばかりで、こゝ四五日は遊んでますからつて、さういつ
て頂戴。ぢや、よろしくね！」

いよいよと首を右にかたむけ、右手をあげて歸りかけたが、また、

「あ、それから、あと五六日すると、あたし、いよいよ淺草の劇場に出るの、招待券お送りするから、あなたもいらつしやらない、高木さんとごいつしよに、ねッ？ ぢや、さようなら！」

まるで貴婦人が目下のものに對するか、あるひは年かさの人が、うんと幼い少女にでも對するかのやうな調子で、いふだけのことをいふと、——ほんとうは雅子といくらも遠ふまいと思はれる、その若い女は、折からやつて来た荏原町驛ゆ

きのバスに、ひらりと飛び乗り、右手のおや指を胸にあて、残りの四本の指をピヨイピヨイとまげて見せながら、スーツとバスとともに去って行つた。

雅子は、なんだかよごれた雑巾でも顔をなでられたやうな、不愉快な氣持もしたけれど、あんな人も世間にはあるんだらうぐらゐに思ひながら家に歸つた。

家に歸ると、夕飯の支度をしてゐた母のしげ子が、

「マアちゃん、せつかくいたゞいたんだから、早く活けるとい、ね、お花」

「ええ、さうませう」

「だけど、あの人もまた、ぎやうさんに買つてきたものね！ すいぶんしただらうに……」

「やね！ お母さんは何でも一度お金に代へてみるんだから……」

「だけどさ、——ま、いゝよ、とにかく、せつかくいたゞいたんだから、自分のお部屋だけでなく、座敷にも、それから離れにも、活けるといゝね」

「いゝえ、私、すつかり座敷の壺に活けるつもりよ、せつかくなら、その方が豪華でいゝから」

母がバケツの水につけておいてくれた花を、そのバケツごとさげて、雅子は縁端に出た。それから座敷の床の間から、父が十年も前に手に入れて、いまだに掘出し物だつたと自慢してゐる大きな壺をかゝへて来て、花を活けにかゝつた。頭の中では、あんな妙な女の人にお近づきのあるやうな人のゐる部屋に、だれが花なぞ飾るものかと思つてゐた。けれども、すつかり一つに活けてしまふには、どんなに壺が大きいにしても、やつぱり花の方が多すぎた。

ちやうどそこへ、あそびに行つてゐた妹の光子が、庭の方からやつて来て、

「うあ、きれい！ ほしいわア」

と、いつたので、

「ええ、あなたにも活けて上げるから、早く花瓶をもつてらつしやい。……そ

れから、離れのもね！ お水を入れて」

けつきよく、離れの一輪ざしにも、クリーム色のバラの一輪が活けられた。

茶の間には夕餉の支度がととのへられた。野球の選手で、いつも練習があると
いふのを口實に、兄の一夫よりも遅く歸りがちの次夫も、とつくに歸つてゐた。

この頃すつと歸りの遅かつた父の陽三も、今日は珍らしく暗くならないうちに
歸つて來た。

夕餉の膳に姿を見せないのは、もう進太郎だけであつた。

「どうしようね、あの人、お夕飯のことはなんにもいはないで出かけたんだけれ
ど——」

「いゝぢやないの？ うちのお夕飯には定刻があるんだから、さきにいたゞきま
せうよ」

まつさきに答へたのは雅子であつた。

「でも、せつかく、今日こそみんなそろつてお夕飯がいたゞけるだらうと思つた
もんだから、母さんフンバツして、まぢさうこさへたのになえ」

母のしげ子には、それが少々残念さうであつた。

「なあに、とつておけばいゝさ」

父の陽三は、とりなし顔であつた。

「さうよ、どうせ幾時に……」といひかけたが、さすがに雅子もそれ以上は語尾
をにごした。

「異議なし！」と、とんきやうに次夫がチンと茶わんを箸でたいて、母にら
まれ、頭をかいた。ついでにペロリと舌も出した。

みんなが吹き出して笑つた。

なごやかな夕餉であつた。そして夕餉がをはつた。食後の雑談がひとしきりつ
いたのち、子供らは勉強部屋にひきあげて行つた。母のあとかたづけの手つた

ひをすまして、雅子も二階へ去らうとすると、父がそれ呼びとめた。

「なあ、雅子、お母さんから話はよく聞いただらうが、どうだね、例の件、お前はとう思ってるんだね？」

「……」

「今日も永瀬さんの奥さんが見えなすつたさうだが、この頃では奥さんだけではなく、永瀬さんもな、しきりにお父さんに催促しなされるんだよ。なんせ、毎日のやうに工場で顔をあはせてゐるんだからな、さうさうお父さんとしてもウヤムヤな返事ばかりしてゐるわけには行かないのさ。それで實をいふと、ちよいと困ってるんだが、——どうだね？」

「……」

「イヤかね？」

「イヤとかオウとかでなく、私、もうすこし、考へさせていたゞきたいんだけれど」

「もうすこしといふと……？」

「せめて一週間か十日……」

「なるほど、それはもつともだ。よしよし、そのくらゐなら向ふにも待つてもらはう」

「でも、一週間か十日しても、私……」

「かならずしもハイとはいへないかもしれないかもしれんといふんだね？ ウム、それもやむを得ん、まアよく考へてみるんだな、その上で、お前の考へに、なるほどと思ふふしがあれば、お父さんたちも決して無理にといふわけではない。とにかく、よく考へてみるんだな、いゝか」

「ええ」

うなづいて、茶の間を出かけたが、

「あゝさうさう！ ねえ、お母さん、進太郎さんが歸つたら、大木美鳥さんつて

人が、たづねていらしたつて、さういつておいて下さいね、大きな木の美しい鳥さん、ねッ？」

すると母よりさきに父がたづねた。

「何だい、その大きい木の美しい鳥つてのは？」

「そんな名前の人なのよ」

いひすてて雅子は二階へひきあげた。勉強にか、つた。九時すぎ頃、雅子は玄關の格子のあく音を聞いた。まもなく父と進太郎が聲高に話をはじめたのも知つてゐた。雅子は、しかし、おりて行かなかつた。十時頃になつて、もうやすまうと思ひ、ちよつと茶の間におりたが、その時にはもう進太郎は離れへひきあげて母だけが電燈の下で縫ひものをしてゐた。

「お母さん、進太郎さんに大木さんのこと話して下さいませんか？」

「あゝ話したよ。——その人、レグユーの踊子さんだつてね！」

「さう？……さういへば、たしかにそんな風の人だつたわ」

その話は、しかし、それだけでやめた。

「ちや、お母さん、おやすみなさい、あんまり夜ふかしはお體に毒よ」

「おやおや、今日は母さんが夜ふかしのお説教をうける番かい」

「ええさうよ」と笑つて、雅子は二階へひきあげた。

あくる日も進太郎は朝から出かけて、夕方には、雅子のいふ「お夕飯の定刻」よりも、うんと遅れて歸つた。さういふ日が數日もつづいた。さうするうちに、雅子も、大木美鳥に、わるくなれなれしく、ぞんざいな言葉をかけられた時の不愉快さなど、すっかり忘れてしまつた。そして土曜日が來た。いつもより早く歸つて、二階の部屋で着更へをしてゐると、下の庭から進太郎と一夫の話聲が聞えて來た。

「一夫君、いつとき休まうか」

「ええ、さうませう。——進太郎さん、疲れたでせう」

「疲れるもんか、これッぼちの仕事！ いゝ氣持さ」

「ほんとにいゝ氣持ですわね、汗を流したあとは！」

それから一夫のらしい口笛の音が聞えて來た。すぐに一段と力づよい口笛の音が、それに調子をあはせた。ヴォルガの船唄のふしであつた。元來は一脈の底の知れない憂鬱さをおびたその曲を、二人の口笛の主は、いかにも元氣よく、朗々と吹きまくつてゐた。まつたく、愉快さうであつた。

いつたい、何をしてゐるのだらう、と思つて、雅子は、窓の障子のすきまからそつと下の庭をのぞいてみた。たぶん、築山でもつくるつもりであらう、どこから運んできたのか、廣くもない庭のすみに、あたらしい土の山をきづき、その土の山に並んで腰をおろして、進太郎と一夫は口笛を吹いてゐるのであつた。二人とも元氣よく右手を振つて調子をとつてゐる、——といふより、さうすることに

よつて、一層その自分たちの歌に元氣をつけてゐる、といふふうに見えた。運動シャツに運動ズボン、二人とも、いとも身がなるなふうをしてゐた。

雅子は思はずウツツと笑つた。

自分たちが運んできた土の山に、ちかに尻をおろして、いかにも楽しさうに口笛を吹いてゐる二人の無邪氣な姿。それはとても二十五の青年や十七の少年とは見えなかつた。まるで十二か三の子供のやうであつた。

「愉快ね！」

雅子は、ひとり微笑をつづけながら、なほも二人の様子を見まもつてゐた。と、とつせん、一夫が口笛をやめた。

「ねえ、進太郎さん、ぼく、こないだから、あんたに聞きたいと思つてたんだけ

れど——」

「何だい？」

進太郎も口笛をやめて、一夫の方を見た。

「お父さんのことですよ、お父さんのやつてゐること、あれは正しいか、どうか、ぼく……」

「正しいよ」

「正しい？ あなたはそれを断言するんですか」

「断言する」

「……？」

一夫は雅子によく似た黒い大きな目で、ちつと進太郎の顔をあながあくほど見つめた。すると、進太郎は、思はず、まぶしげに臉をバチバチとやつて、

「ぢや、君はどういふんだい？」

と、しづかに問ひかへした。

「だから、ぼく、わからないといふんです。ぼく、とても迷つてゐるんだ」

「お父さんを信ずることが出来ないのかい、いつだつたか君は自分でも個人としてのお父さんには尊敬するといつてゐたが……？」

「さうですよ、人間としてのお父さんには、ぼく、尊敬するんです、絶対に」

「人間として立派な人が、まちがったことをするだらうか」

「そりやしますよ、自分ではさう思つてゐなくても、結果においては、まちがつたことをしてゐる場合があると思ふんだ、つまり、認識のあやまりなんだ」

「ニンシキの……？」

「さうですよ、そして、お父さんの場合がそれなんだ、お父さんは労働者のほんとうの幸福のためにといつて、あんな運動をしてゐるけれども、實際は、自分でも氣がつかないで、仲間である労働者たちのためよりも、自分の傭主である資本家の利益になることをしてゐるんだ、だから反対派の人たちからお父さんはイヤだなんていはれるんだ、ぼく、それがくやしい」

「一夫君」

いつもヒョウヒョウとしてゐる進太郎の聲にしては、それは改まった調子であつた。

「ぼくはネ、一夫君、君が好きなんだよ、將來有望の少年として大いに期待してゐるんだ。しかし、ぼくの見るところでは、君には何かあり餘つてゐるものと、それから、反對に、なにかすこし足りないものがあるんぢやないかな、ぼくにはどうもそれが氣がかりなんだが……」

「何です、そのあり餘つてゐるものと、足りないものつてのは？」

「ウン、そいつはどうも、ちよいと説明が……」

雅子はまた、ひとりで思はずウフツと笑つた。大きな青年が小さい少年に問ひつめられて、まごまごしてゐる様子がをかしかつた。そのくせ、そのいひまはしは妙であるにもか、はらず、あの男の一夫についての觀察は案外まちがつてゐな

いと思ひ、そのことには好感がもてた。

「まア、要するにだ、君は少し神経質すぎるんだよ、それも君が眞面目な少年で、誠實に生きて行かうとするからこそ、さうなるんだとは思ふが、——しかしとにかく、お父さんの運動なり主義なりについて、さういふ考へ方をするのはよくないと僕は思ふね。考へてみたまへ、君のお父さんは佐世保の海軍工廠を振出しに、三十幾年の永いあひだ職工として……」

「ウン、その職工からして、ぼく、どうかと思ふんだ！ お父さんはよく、おれは職工だ職工だと自分ではいつてゐるけども、お父さんは自分の方からは望みもしないのに、會社から技師といふ肩書をおしつけられ、しかも實際には、技師以上の待遇をしてもらつてゐるんだ。主任技師の永瀬さんなんかとおんなじに。——ぼく、思ふんだけど、ほんとうに労働者の味方である人を、會社側がそんなに大事がるわけがあるだらうか」

「そこだよ、君！、その労働者と経営者をイヤがオウでも階級的に眺め、對立的に見ようとする立場、それが根本からお父さんの考へ方とはちがつてゐるんだ、ねえ、君、経営主と労働者は、どうして敵同志でなければならぬんだ？　どうして味方同志であつてはならぬんだ？」

「だつて、そりや……」

「まあ待ちたまへ、そしてお父さんの言葉を思ひ出してみようぢやないか。お父さんはね、きみ、かういふんだよ、産業といふものは経営者のためのものでもなければ、労働者のためのものでもない。それを自分等の利益本位に考へるのがそもそもまちがひで、すべての産業が國家のものであり、國家のためにあるんだ。お國あつての産業、お國の光榮のための産業なんだ。この大きな目的から考へる時、どうして経営者と労働者が敵同志として對立する必要があるんだ？　——ねえ、カヅちゃん、君のお父さんも、かつては労働運動の闘士だつたんだせ。はや

り言葉でいへば、それこそ輝ける闘士だつたんだ。そのお父さんが外國輸入の左翼主義を棄てて、日本主義の今の運動に身を入れるやうになつた動機は、——君は聞いたことがないのかね？」

「ヨーロッパに行つた時からなんでせう、もう十四五年も前に」

「さうなんだよ、お父さんが一職工として、技術修得のためにヨーロッパへ派遣された時の、たましひの底からにじみ出た信念にもとづくものなんだ。お父さんはヨーロッパへ行く途中に、上海へ行つた。印度へも行つた。そして、そこで何を見たか？　自分の國にゐながら少數の歐米人にコキ使はれ、しひたげられてゐる支那人や印度人のみぢめさ、あはれさ……。お父さんは思はずそつとして身ぶるひしたといふんだ」

「はッはッは、センチメンタルだな」

「ばかやらう！」

びしやツと音がした。進太郎の大きな平手が、少年のやはらかい頬ツべたに飛んだ。

「まあ……」

雅子は三寸ばかりあけてゐた窓の障子を思はずビシヤリとしめて、トントントンと二階からおりて行つた。縁から庭下駄をつつかけて、進太郎の前に立つた。

「進太郎さん、どうしてそんな亂暴をなさるの？」

「やあ、見てゐたの、マアちゃん？ はッはッは、この子、だめだよ、觀念のおばけにとりつかれてやがる！」

進太郎は雅子の顔を見あげて、頭に手をやった。

雅子は、しかし笑つてゐなかつた。自分がそこを打たれでもしたかのやうに、片手を頬にあてたまゝ、きつい調子で答へた。

「觀念のおばけにとりつかれてる子には、よく話して聞かして、そこから解きは

なしてやるべきだわ。なぐるなんて、——相手が子供でなくつたつて醜態よ」

「弱つたな、さうまッ正面からやられるれば、むろん、こちらが悪いよ、——カッ坊、ごめんだよ、痛かつたかい」

「い、んだよ、姉さん、よけいなおせつかい、よせよッ」

「あれあれ、同情して叱られて姉さんわりにあはないわ」

そこで三人は聲を立てて笑つた。

幼ければ幼いなりに、こゝにも惱めるものがあつた。

だが、ちやうどそこへ學校友達が遊びにきて、一夫は自分の勉強部屋へひきあげて行つた。

かれ 中空に

庭のすみに進太郎と雅子だけが残された。

進太郎は、やはり自分たちが運んできた土の山に腰をおろしたまゝ、しばらくだまつてゐたが、やがて雅子に——しかし、はじめのうちは、むしろ、ひとりごとのやうに話しかけた。

「なにしろ、世界せんたいがコントン時代だからな、だれしも考へるんだよ、いろいろ。さうして一層わからなくなつてくるんだ。よつほどしつかりした信念をもつた人か、あるひはバカでないかぎりはね！……だけど、さうしたことに頭をつツこむには、あの子、まだすこし早すぎはしないかな？」

「さうね」

「とにかく氣をつけてやるんだな、とりかへしのつかないことになったら大變だから……」

「……」

「ねッ、すこし運動——スポーツでもやらしてみたらどうだらう、ツギ坊みだいに」

「ほんとに、あの二人、兩方をつきませて、二つに割ると、ちやうどいゝんだけどね！」

「まつたくね」

そこで二人は軽く笑つた。それをしほに、

「ところで、マアちゃん」

と進太郎は相手の顔を見あげた。

「きみ、いま忙しいの？」

「なほ？」

「忙しくなけりや、すこし話したいことがあるんだが、——？」

「聞くわ」

雅子は、その時まで進太郎のすぐ近くに立つて、片足で地べたに半圓を描いた
り、軽く土を蹴つたりしてゐた。が、この時、生垣のそばの吉野櫻のところまで
歩いて行き、その幹に片手をかけて、もう一ぱい若葉をひろげた梢を見あげなが
ら、

「なあに、お話つて？」

と、なにげなくなつた。

進太郎は、足もとの土を右手でつかみあげては、さらさらと左手の掌に落し
てゐたが、きふにパチパチと両手をはたいかと思ふと、

「ウン、實は君の結婚の話だがね」

と、いきなり、きり出した。

「私の……？」

おもはず問ひかへしてチラと進太郎の方を見た、その雅子の顔には、いくらか

狼狽の色が見え、あとにつゞく言葉は、ひとりでに低い聲となつた。

「……お母さんが話したのね？」

「いや、お母さんからも聞いたが、實はお父さんからもお話があつたんだよ。お
父さんもお母さんも相當この話には乗氣になつてゐられるやうだが、實をいふと
ぼくも大いに賛成だね。——どうだい、マアちゃん、ひとつ眞面目に考へてみな
いか」

「……」

「ねッ？」

「ええ、ありがたう。むろん、眞面目に考へてるわ」

「ウン、そりや、むろん、さうだらうが、——で、どういふ風に考へてるの、い
つたい？」

それには答へなかつた。そして、この時、雅子の顔には、皮肉とも茶目ツ氣と

もつかない奇妙な微笑がうかんだ。同時に、右の手では生垣のマサキの葉を二三枚つみとり、それを左手の掌たんでらにならべて、意味なく見つめてゐたが、すぐ、ぶツとそれを吹き飛ばすと、からりとした調子で、

「ねッ、進太郎さん、あの大木美鳥さんてひと、なあに、あなたのお友達？」
と、あべこべに問ひかけた。

「大木……？ あ、なんだ、きふに……。いまそんなこと聞いてどうするんだい」

「どうしようといふんぢやないわ、たゞ聞いてるだけよ。——ねえ、お友達？」

「友達なんてんぢやないさ、友達の……」

「妹さん？」

「いやいや、友達の友達——つまり、い、人つてでもいふかな、そんな人だったんさ、以前」

「以前？ ——ちや、いまは？」

「いまは何でもないさ、ぼくがその友達のお母さんに泣きつかれて、絶交さしちやつたんだからな」

「へええ、あんたも案外おせつかいが好きなのね！」

「ちえッ、ひどいことをいふなア。冗談ぢやないよ、ぼく、いまだつてその時のことを思ひ出すと、冷汗いあせが出るんだせ。……仕方がなかつたんだよ、その友達は小學校から中學校まで、ずっと僕の同級生で、いまも親友なんだからね、そのお母さんから事情をうちあけられて、こんこんと泣きつかれてみると、ぼくとしては……。しかし、まつたく、いやだつたなあ、あん時は！」

「いつの話？」

「去年……いや、一昨年さ、佐世保での話だよ」

「へええ、——ちや、あの人、佐世保にゐたの、その頃？」

「なに、巡業に來てたのさ」

「——だけど、さういふ目にあはされたあなたのところに、どうして、あの人、たづねて來たりするんでせう？」

「ほんとうだね、實にをかした女ぢやないか、ぼくにだつて見當がつきやしないよ」

「第一、あなたが今こゝにゐること、どうして知つてたの、あの人？」

「なに、そりや偶然さ、ぼく、あの日、ある先輩と銀座で逢つたんだよ、モナミとかいふ喫茶店だつたがね。その時そこへ、あのセンセイも、ひよつこり現はれたのさ、それも僕のその先輩とは顔みしりだといふ男の人と一しよにだせ。はじめは氣がつかなかつたんだが、先輩が僕をその男に紹介してくれ、いろいろ話をしてゐるうちに、あら、おや、といふわけで、ははは、ちよつと驚いたよ、世間は廣いやうで狭いもんだつて、つくづく思つたね。——ところで、そんな話は、

この際ごうでもいゝよ、それより今の話、ほんとにどうだね、マアちゃん？」

「……」

「君の勉強をつづけたいといふ氣持は、よくわかるけど……」

「そんなこと、實をいふと、私、そんなに問題にもしてゐないわ。……いざつてなれば、私、これで思ひきりはいゝつもりよ」

「ちや……？」

「ええ、いづれはネ、ご忠告に……したがふことに……なると思ふわ。……どう

せ……女は、一度……」

雅子は、言葉の途中で櫻の根もとを離れ、進太郎とは反對がはの庭のすみの方へ歩きながら、それを言つた。歩きながら、チューリップの花に目をやつたり、頭にさしかゝるキャウチクトウの葉をむしつたりしたので、言葉は一句づつ、とぎれとぎれになつた。

「あゝさう、それを聞けばもういふことはない、——ウン、よかつた！」
最後の一句をキツカケにして、進太郎も立ちあがつた。

雅子は、そこからすぐ家の横の原ツばに出られる、庭のしをり戸をあけて、出て行かうとしてゐたが、その時、ふりかへつて、進太郎の方を見た。二人のあひだは五間以上も離れてゐた。

「進太郎さん、私のこともだけど、あなたの方はどうなつてるの？ お仕事の方、もうきまつて？」

「ウン、ありがたう、おかげさまでネ、やつと、きまつたよ。……いよいよ満洲だ！」

「満洲？」

「あゝ満洲だよ」

「……こちらにはなかつたの？」

「ウン、いや、氣ながに待つてればないこともなからうが、しかし、ぼくとしては、むしろ、望んでゐたところなんだからな。本望さ。働くよ、力いっぱい」
「……ほんとうなの、進太郎さん？」

「ほんとうだとも！ その準備やら打合せやらで、こゝんところ、まつたく、てんでこまひをさせられたが、やつと萬事終了、もはや出發の日を待つばかり、といふ寸法さ。はッはッは」

「……で、いつ？」

「それがまた少々急でね、明後日だよ、明後日の朝の六時だ」

「あさつて？」

「ウン、それも飛行機だぞ、京城までだがね。——おい、聞いているかい、マアちやん？ はッはッは」

「進太郎さん！」

雅子は、その二人のあひだの五間ばかりのところを、両手をさし伸べだま、つかつかと相手の方に近づいて行き、

「おめでたう！」

と、土によごれた青年のたくましい右手を、しつかりと両手で握りしめて、力まかせにゆすぶった。

「しつかりやつてね、しつかりやつてね！」

雅子の目頭は、われにもなくヂーンと熱くなつた。が、雅子はつづけた。

「期待してよ、期待してよ」

「ありがたう？」

進太郎も、ぎゅつと力をこめて相手の手を握りしめた。たくましい青年の手の中に、しなやかな女の手は、たちまち、ぐにやツと碎けさうであつた。と感じたとたんに、進太郎はあわてて手をひっこめた。

「ぼく、今夜はまた先輩のところへ出かけなければならぬが、明日は小母さんが送別會のつもりで、ごちさうをして下さるさうだから、その時ゆつくり話さう」

いひすてて、進太郎は、いまさき雅子が出ようとしてゐたし、戸の門から、その原ッばに出た。そこにはさつき土を掘る時にぬいだ下駄があつた。陽三から借りてゐる下駄である。それをぶらさげて、こんどは外から湯殿にまはり、足を洗つた。つめたい水でジャブジャブと顔も洗つた。ついでにクリクリぼうすの頭も冷した。それから、腕を伸ばしたり、まげたり、體操みたいなことを二三回くりかへした。それでいくらか氣持がしづまつた。彼は、さつきから、おれは非常に重大な機會を失はうとしてゐるのではないか、といふやうな氣がして、なんだかおちつかない氣持であつた。

「これでよし、萬事終了！」

中一日おいて月曜日の朝、進太郎は、空輸會社の飛行場から、スーパー・ユニ

ヴァサルヴァサルの六人乗に乗りこんで、空の旅人となつた。
 数日すると、京城のスタンプの繪葉書の便りが、陽三あてにとゞいた。

わが乗る飛行機が地球を離れる時には、生れてはじめての経験のせゐか、
 實に何とも愉快な氣持でした。うあい、このおれを見よ、とでも叫んでやり
 たいやうな氣持でした。

けれども、空の旅わづかに數時間、午後にはもう無事に京城につきました。
 所用のため三日程こゝに滞在。たゞちに滿洲へ向ひます。こんどは汽車で
 ず。

永々とお世話さまになりました。小父さま小母さまの御親切は忘れません。
 皆々様の御健康と御多幸を切に祈り上げます。

四月××日

京城にて 進太郎 拜

皆々様の中に一括されて、べつに雅子だけにあてた言葉はなかつた。それに輕
 い不満を感じないでもなかつたが、しかし、

「地球を離れる時にはなんて、いかにもあの人らしい表現ね！」

と雅子は笑つた。

父も母も弟たちも笑つた。

けれども、雅子は、その進太郎が東京を立つ朝は、彼を飛行場まで送つて行か
 うか行くまいかと、すいぶん迷つたものであつた。行きたいと思ふ氣持の方が強
 かつた。はるかに強かつた。それに、行かうと思へば、わけなく行けましたので
 あつた。學校を一時間か二時間おくれればよかつたのである。けれども、さうし
 た自分の氣持をいたはつてゐるよりも、むしろ、みづから苛酷でありたい、とい
 ふやうな氣が、その時の雅子には何かしらしたのであつた。けつきよく、見送り

には行かなかつた。むろん、弟たちも行かなかつた。父の陽三だけが、一家を代表したかたちで、飛行場の見學かたがた出かけて行つた。

進太郎の表現にしたがへば、その「飛行機が地球を離れる」と聞かされてゐた時刻に、雅子は、弟たちとともに庭に出て、進太郎と一夫がきづいた土の山の上に立つた。

やがて西南の空の彼方に、今日は特に胸にと、ろくやうな飛行機の爆音が、力づよく響いて來た。

機の姿は見えなかつた。

それに果してそれが進太郎の乗つてゐる飛行機なのか、どうか、それもわかりはしなかつたが、いや、あれだ、あれにちがひない、と弟たちはいひ、雅子もまたさう思つて、

「進太郎さん！……お元氣で！」

と大空に向つてハンカチを振つた。

われにもなくポロポロと涙がこぼれた。雅子はあわてゝ土の山を下りた。弟たちに顔を見られるのがイヤだつた。いそいで二階の自分の部屋にひきあげ、その窓から一人で空を見あげた。

が、飛行機の姿はつひに見えず、そのうちその爆音さへも遠くなり、やがて聞えなくなつた。

「あのボーバクとして、ヒョウヒョウとした男は、こんどはまた、なんてさうざうしくやつて來て、さうざうしく消えて行つてしまつたことだらう、まるで風みたいに——」

さう思つてゐると、なんとといふことはなしに、われ中空に……といふ古い歌の句が思ひ出され、われ中空に……と意味なく口ずさんでゐるうちにふつと、

「……かれ中空なみぞらに消えにけり」
と、をとけた文句ぶんくを思ひつき、はつきりそれを口に出してみて、はじめて雅子
は、ウフツと笑った。

「かれ中空に……」

つぶやきながら制服せいふくを着た。

腕の時計を見た。

学校に出かけるには、まだすこし早さうであつた。

雅子は緑いろの革かわの手提カバンからノートをとり出して、

「感覚トハ……対象たいしょう體驗ヲ……抽象分析シテ……知ラレル……意識ノ中デ……最
モ單純ナ……」

と、一句づつ頭あたまの中にたゞきこまうとするやうに、いちいち自分でうなづきな
がら、ブツブツとつぶやきはじめた。

雅子と進太郎は、かうして別わかれた。
昭和六年の春であつた。……

血につながるもの

「……あの時は私もまだ十九だつた。……すると、あれからもう九年になるわけ
だわ。……かれが中空なみぞらに消えてから……」

雅子は、二階の机つくえの前にすわり、机に軽く頬杖ほづえをついて、そんなことなど思ふ
ともなく思つてゐた。

もうなにかも支度はできた。

部屋へやのすみには、ちやんともう、中型ちゆうがたのトランクと、ポストンバックと、手提
カバンが並べてある。

トランクには、わづかながら衣裳の類が入つてゐる。

クリーム色のポストン・バックには、身のまはりの品々。

黒革の手提カバンには、——自分が女醫であることが、これからの旅にも果して役に立つかどうか、それは心細いにしても、とにかく、ひととほり診察用の道具を入れた。

それから、父母の寫眞、ノート、便箋紙、封筒、葉書、萬年ペン……。

もう忘れものもなささうだ。

あいさつに行くべきところには行つて来た。

注射もすんだ。

あとはもう今晚ひと晩こゝに寝て、起きたら朝のうちに髪をととのへ、衣裳を更へて、両親の墓參をすませば、午後にはもう……。

さう考へてくると、雅子は、あわたししかつたこの數日にひきかへ、自分でも

不思議なくらゐ、かへつておちついた氣持になり、いろいろと過ぎ去つた日のことなどが思ひ出されて来た。

けれど、過ぎた日のことは思ふまい。明日からのことを考へよう。

明日からは……と考へようとした時、

「お姉さん。……お姉さん！」

と、階段の下から呼ぶ聲がした。

若いくせに、かすれたやうな聲で、——しかも、そのかすれたやうな聲が、かへつて妙な魅力みたいなものになつてゐるやうな呼び方は、顔を見るまでもなく一夫の妻であつた。

「はい。……なあに、澄子さん？」

雅子は、机に頬杖をついたまゝ、顔だけを階段口の方に向けて、弟の妻にこた

へた。

「お膳の支度、もうあらまし出来ちやつたんだけど、——まだ御用をしてらつしやるんですの？」

「いゝえ、もうなんにも……」

「ちや、すぐ下りてらつしやいよ、主賓が座におつきにならないと、はじめられないんですつて、男の人たちさういつて、ぼやいてますよ」

「さう、ちや、すぐ……」

一夫の妻……澄子の屈託のない笑ひにこたへて、雅子も思はず微笑をもらしながら、頬杖をとき、もうそんな時間なのかしらと腕の時計を見た。まだホンの正午すぎのやうな氣でゐたが、もう五時半であつた。ほう！ と驚きながら、しづかに立ちあがつた。

「主賓か、……主賓ならば、それらしくとりすまして、すこしおめかしでもする

んだつたわ」

むろん、眞面目に考へたわけではないが、そんなことを思ひながら、雅子は自分の着てゐる衣裳を見まはした。麻の葉の地紋に、かんたんな、しぼり染めをしたヒトへ。うす緑の地に、芙蓉の花と葉を、わりに寫實に近く描いたヒトへの帯……正午すぎ女子醫事時代の恩師をおとづれた時のまゝの服装であつた。

「どういたしまして、これでも私のおき一枚よ」

自分でさう答へながら、しづかに階段を下りた。すぐ座敷に入つてゆくと、なるほど、八疊の座敷に應接机とチャブ臺を並べて、それに白い布をかけ、もりたくさんの御馳走の皿や小鉢が一ぱい並べ立ててあつた。

「おゝ、たいへんなおごちさう！」

しせんにこみあげて来た喜びと感謝の氣持を、さう聲に出して、ひとりごとをいふと、

「あ、姉さん！ 姉さんはね、その床の前の正面だよ、名札がついてるだらう？」
と、茶の間から次夫が聲をかけた。

「ホ、……、すっかり本式ね！」

「さうさ、本式の送別晩餐會だよ、盛大にやるんだから、そのつもりで、うんと食べてもらはなくツちや！」

「ありがたう。……でも、あなたがたのがうしたお氣持だけで、姉さん……もう胸が一ぱいよ」

「……なあんて、しほらしいこといつて、姉さんらしくもないや。いゝぢやないか、胸は一ぱいでも……」

といひかけて、次夫が笑ふと、その次夫の若い妻が、

「お腹は大丈夫でせう？」
と、あとをつづけた。

茶の間にあるみんなが笑つた。

雅子も笑ひながら、いはれたとほり正座にすわると、ちやんとお箸のわきにカードがおかれ、それに「主賓——姉上様」と書かれてあつた。をどけものの次夫の字にちがひなかつた。

うふツ、やつたな！ と思ひながら、雅子が、

「次夫さん、主賓はもうとづくに席についててよ、あんたがた、いつまでお客さまを一人にしておくの？」

と、ふざけて聲をかけると、

「あッ、すみません、いま行きます！ が、ちよつと……」

と答へたのは、をどけた次夫ではなくて、眞面目くさつた一夫の聲であつた。

茶の間では、なにか相談でもしてゐるらしく、しばらくヒソヒソと話しあふ聲がしてゐたが、やがて、

「いゝさ、いゝさ、それでいゝよ」
 氣さくな次夫の聲に應じて、

「ちや、さうしよう。——やあ、姉さん、失禮！」

と、さかひのフスマがあいて、まつさきに一夫が出て来た。

「さんざん待たしちやつて、——お腹すいたでせう？」

さういひながら、ちつと姉の方に笑ひかける二つの大きな目は、昔のとほり、黒く生々と澄んでをり、それがいくらか神経質さうに見えるこゝなども、昔のまゝであつたが、しかし、さすがにその顔は、もう九年前の少年ではなかつた。瘦せぎすではあつても、どことなくドツシリとしたおちつきがあつて、それが二十六歳の若者を、年よりは「しつかり者」に見せてゐた。着てゐる着物も、地味なかはりに、物は確かな昔のセルであつた。それは父のおゆづりであつたが、その亡くなつた父よりは、すつと丈が高いので、腰あげはおろしてゐても、裾から白

い長い脚が見えすぎてゐた。

一夫は、その白い長い脚の右の方を、いくらかひきするやうにして、軽いピツ

コをひきながら、雅子のそばまで来ると、

「さあ、それでは次夫の指定に従つて……」

と笑ひながら、その左がはに横膝にすわらうとして、ちよつと顔をしかめた。

……一夫は、右脚に傷をうけた傷痕軍人であつた。

すぐに次夫も出て来た。これも今はもう二十四の若者であつたが、これは兄の次夫とは反對に、がっちり頑丈なからだつきであつた。わりによく似合ふ國民服を着て、片手にお銚子は持つてゐたが、

「兄さん、どうしよう、光子のところ、まだ来ないんだが……？」

と、そのお銚子をかざして見せながら、一夫にたづねた。

「あら、——ちや、ミイちゃんたち、まだだつたの？」

一夫が答へる前に雅子がたづねた。

「あゝ、まだなんだ、なにをグズグズしてるのか、けしからん奴どもさ、かならず五時半までには来いって、あんなに念をおしておいたのに……」

次夫は、まんまるい顔をしかめて見せながら、どつかりと雅子の向ふがはにすわると、

「まあ、いゝや、ぼつぼつ始のよう、ちやんと主賓は見えてるんだし、それに、もうすぐ六時だから、ねえ、兄さん？」

と、兄の同意を求めたが、その返事も聞かないで、すぐ、

「さあ、それでは主賓の姉さん！ ひとつ、つがして」と、お銚子を雅子の方に向けた。

「あら、——どつて、みんなそろつてから乾杯するんぢやないの？」

「ウン、もうすぐみんな来るよ。——さあ、兄さん！」

次夫は中腰になつて、對角線の位置にゐる兄の方へ腕を伸ばした。兄の杯に酒をつぎ、ついでに手もとの自分のにもつぐと、

「おい、嫂さんも雪枝も早くこつちへ来ないか、姉さんお待ちかねだぞウ」と、茶の間へ聲をかけた。

「さうだ、さうするといゝ、そつちの方はもういゝかげんでいゝよ」と一夫もいつた。

一夫の妻の澄子が出て来た。すぐに雪枝も来た。

澄子は、小柄で、まる顔の、どちらかといふと人好きのする、十人並の女であつたが、すでに子供があるせゐか、年よりは老けて見えた。そのかすれたやうな聲ほどではないにしても、とても二十二の若さには見えなかつた。着てゐるものも、わりに地味なメイセンの、ふだん着であつた。

雪枝は、——たとひ、その名のやうに色は白くないにしても、これも決して十

人並以下ではなく、ひどく明るい感じの大柄の女であつた。年もまだ二十一、あけすけで、無邪氣で、その點、次夫とは似合ひのよい夫婦であつた。これもメイセンのふだん着であつたが、しかし、これは年に相當した派手な模様の、まだ新しいのを着てゐた。

二人とも、雅子が世話して迎へさせた、弟たちの戀女房であつた。

澄子は、――そのカードの指定にしたがつて、一夫の横にすわり、雪枝もまた次夫と並んで、一夫の向ふがはにすわつた。そして、その雪枝が、

「ほんとに光子さんたち、どうなさつたんでせうね？」

と誰にともなく話しかけると、すぐに次夫が答へて、

「なあに、あいつ、昇三君が工場から歸つてくるのを、のんびんだらりと待つてんだよ、バカだから。……昇三君には工場からまつすぐに、こゝに寄らせることにして、自分だけでもさきに、さつさと早く來ればいゝんだ、あのバカが！」

と、フンガイして見せた。

「あの人たち、ほんとに仲がいいのね、お勤め以外の時は、どんな時だつて二人ごいつしよなんだから……」

「ヘッ、なんだかそれが羨ましいみたいだね！」

「さうよ、あたし、ほんとに羨ましいわ、だつて、あなたつたら、寝ても覺めても、工場、工場、工場……」

「仕事、仕事、仕事……か！」

「さうよ」

「あたりのえちやねえか、いまは……」

「國をあげての……でせう？ わかつてるわよッ、それは！」

「わかつてるならいふな！」

「フン」

「フン！」

「よしてよッ、あんたたち！ 光子さんたちをわらふどころか、あんたたちの方こそ、あんまり仲がよすぎて、ひまさへあればすぐ言ひあひなんだから……。ほんとに聞いている方が顔負けだわ。——ねえ？」

と、澄子は澄子で、そのかすれたやうな妙に甘ッたるい聲で、あまへるやうに一夫の顔を見た。

一夫は、しかし、さすがに、そばにゐる姉の手前、照れて、ニヤニヤ笑つてゐた。

が、ほんとに照れてゐるのは、むしろ、雅子の方であつた。さうした若い夫と妻との世界を、まるで素通りにして來てゐる雅子は、かういふ場面にぶつつかるごとに、いつも照れてヘイコウするのである。くすぐつたい微笑をうかべて、目の前の御馳走でも眺めてゐるはかはなかつた。

もつとも、今日は雅子もさういふ微笑を一分とはつづけてゐる必要がなかつた。さいはひ、その時、その問題の光子夫婦がやつて來たのである。

「やあ、どうもおそくなりまして……」

光子の夫の田中昇三は、入つてくるなり、しきゐぎはに両手をついて、そこにある誰にもなく、みんなに、ていねいなおちぎをした。次夫の想像のとほり、いつたん家に歸つて着更へをして來たらしく、セルの着物にセルの袴をつけてゐた。六尺に近い堂々たる體格の立派な若者であつたが、目立つて大きな耳や、高い鼻や厚ぼたい唇が、どことなく間のびのした感じの上に、それとは反對に、目が小さく、眉がうすいので、いかにも悪意のない善良さうな青年に見えた。關西なまりの、やはらかひ言葉づかひが、一層その感を深くさせてゐた。

「やあ、いらつしやい！ さあ、こゝだ、こゝだ、昇三さんは！」
いまのいま、光子に對してブンブンとブンガイしてゐた次夫は、とたんに愛想

よく、その妹の夫を、自分と姉との横の席にさしまねいた。そのくせ、光子に對しては、

「ミイ子、おまへは遅れた罰に、今夜は、その嫂さんたちのあひだにすわつて、もつばらお給仕役だぞ！」

と、兄貴の威光は忘れなかつた。

「いゝわ、場所なんか、どこだつて」

一番若い光子は、あつさりと遅れた罪をみとめ、夫の場所からは一番遠い澄子と雪枝とのあひだの、チャブ臺の角のところにすわつた。

「ほんとに嫂さんたち、ごめんなさいね、あたし、もつと早く来てお手つだひしようと思つてたんだけれど……」

「思つただけではイミないぞ」

「フン、あひかはらす意地わるね、次夫兄さんは！ だつて、しやうがないぢや

ないの、いくら待つてたつて、その人、ちつとも歸つて来ないんですもの。——
ねえ、一夫兄さん、その人、すこし叱つてよ、その人つたら、とてもスローモーションだよ、ノロマなの」

光子は、その遠い場所から夫の方をにらんで見せた。黒い大きな目であつた。とつとつた面長の雅子の端正な顔を、すこし形をくづして、ふつくらと丸顔にし紅味と色つやを増したやうな、生々とした美しい顔であつた。ゑんじがかつたセルのヒトへと、ダイダイ色の地に、大きなアザミの模様を描いたヒトへの帯も、華かであつた。

にらまれた夫の照三は、照れくさく、フフンと笑つてゐた。

「ミイちゃん、だめよ、いくら遠慮のないあひだだからつて、そんなに人の前で旦那さまの批評なんかしちや」

「あ、さつそく、やられた！ お姉さんのおこごと、こわい、こわい！」

「おこごといつてるんぢやないのよ」

「ええ、でも、こわいわよ、お姉さんにやっつけられると」

「私、そんなにかわい姉さんかしら？」

「さうよ、いまだつて、あたし、いくらかさうだけど、小さい時は、家でお姉さんが一等こわかつたわ、お父さんよりも、お母さんよりも……」

「そりやミイちゃんも末っ子で、あまえんぼうだったから……」

「いや、あながちさうでもないよ。ぼくなんかも姉さんに對しては、いくらかミイ公とおなじやうな氣持があつたからな、昔は」

と、次夫も告白した。

「さうでせうね、私なんか現に……」

「ええ、私も……」

と澄子と雪枝が同時にいひかけ、同時に止し、顔を見あはせて一しよに笑つた。

雅子は、ちよつと首をかしげた。

「さあ、兄さん、ボカンとしてちやいけないよ、こんどこそ乾杯だ！」

「あゝ、さうしよう」

七人の杯に、つぎつぎに酒が満たされ、杯が舉げられた。

「姉さん、どうぞお元氣で！ 姉さんの御健康と、旅路の平安を祈ります。……」

乾杯！

「ありがたう！ どうぞ皆さんもお元氣で、仲よく……」

次夫が一夫に目くばせをした。

「さあ、兄さん、早く！」

「やつぱりやるのか、開會の辭？ いゝぢやないか」

「開會の辭？ うふッ、そんな形式ばつたこと必要ないわ、わ、わが室伏一族には！」

「ナマイキいふな、ミイ公、その形式の中に、わが室伏一族の魂と情愛とを盛りこまうといふんぢやないか。——兄さん、だめだよ、兄さんが僕に司會者を命じたんぢやないか！ 兄さんの御起立を命じます」

「さうか、司會者の命令か、ぢや、ホンのひとこと……」

一夫が立ちあがつた。パチパチと次夫が拍手をした。みんながそれに倣つた。

雅子は膝の上に手を重ね、頭を垂れた。

「ええ、では、ひとこと姉さんにごあさつを述べます。……ぼくたちの、このよい姉さんは、ごぞんじのやうに、明日の午後、いよいよ満洲へ出かけられます。あとに残される僕たちは、實に淋しい氣持がします。けれども、姉さんの御希望で出かけられるのですから、ぼくたちは、ごうぞ姉さんお元氣で、御幸福で……と心から祈つて、お送りするほかはありません」

次夫がそこでまた力のこもつた拍手を送つた。一夫はそれに力を得たやうに言

葉にも一段と熱を加へて、

「……で、姉さんを送るに際して、ぼく、せひとも、ひとこといひたいことは、ぼくたち弟いもうとたちが、どんなに姉さんを尊敬し、また、ありがたく思つてゐるかといふことです。……お父さんが亡くなられてから、もう五年、お母さんがそのあとを追はれてからでも、まる四年ですが、それからの數年といふもの、この姉さんこそは僕たちの父であり母であつたのであります」

この最後の一言は、一夫自身が思はず目に涙をうかべ、ひとりでに聲を高めたのであつたが、みんなも涙ぐみ、雅子をのぞくみんなのものが、われを忘れて拍手を送つた。

雅子自身は更に更に深く頭を垂れてゐた。

一夫は、ふるふる聲でつぶけた。

「……ぼく、いひたいことは、どつさりあるんですが、……とてもいへません。

それで、最後にもう一度、ぼくたちのよい姉さん、どうぞお元気で、おしあはせに……と心からお祈りします」

しづかに一禮して一夫が座につくと、さかんな拍手がおこつたが、そのあとすぐ一座はシンと静まりかへつた。すると、その静けさを破らうとするやうに、次夫が、

「ありがたう、兄さん、ぼくたちのいひたいことを、すつかといつてくれて！」

さあ、ひとつ！」

と銚子をとつて腕を兄の方に伸ばした。

照三もそれに倣つた。光子も真似た。

座が再び明るくなると、

「ちや、どうぞ姉さんもひとこと！」

と次夫は雅子の方を見た。

「さあ、困つたわ」

笑ひながら雅子が立ちあがると、みんなは一せいに拍手を送つた。と、その音に目をさまされたのであらう、茶の間の方に赤んぼうの泣き聲がおこつた。あわてて澄子が茶の間へ姿を消し、まもなく昨年の暮に生れた英子に乳房をふくませながら、もごつて來た。

雅子のあいさつは、かんたんであつた。けれど、みんなが喜んでそれを聞き、心から拍手を送つた。

「どうだい、ミイ公、やつぱり會といふものは、ちやんとかういふ風にやつた方がいゝだらうが？」

「さうね、わるくないわ」

三人の若い元氣な男も、しかし酒の方は強くなかつた。まもなく酒のかはりにお茶が運ばれ、赤んぼうの英子をも加へた八人の一族は、雅子を中心にして話の

花を咲かせた。もつとも、かんちんの雅子は多くは開手であつて、あまり自分の方からは語らなかつた。それでゐて、雅子は、なにか心たのしく、ゆたかな氣持であつた。この賑かな座敷のどこにも今は父の姿も母の姿もなかつた。それはこの上もなく淋しいことではあつたが、そのかはり、その父と母との血と魂をうけつぎ、さらにそれを永遠につたふべき若ものどもが、こゝには集まつてゐる！

「ねえ、みんな、ほんとにしつかりやつて下さいね！ この十年近くのあひだに日本には、とても今からは想像もされないやうな、たいへんな出来事や變動があつて、若い人々の多くが、どんなに悩み苦しんで来たかしのれないけれど、——もう大丈夫よ、お國の方向はきまつたし、國民の足並もそろつてゐるんですからね！ ……みんな若いんだし、しつかりしてくるし、姉さん、ほんとに嬉しいわ。姉さんの役目はもうこれですんだのよ、私、ほんとに安心して、しばらく旅行させていたゞくわ。——皆さん、ほんとにありがたう、おごちさう心から嬉し

くいたゞきました。——ちや、男の人たち、みんな朝が早いんだし、私も長い旅ですから、今夜はこれくらゐにしておきませうね！ 下關……釜山……京城……奉天……ハルビン……。ほんとに、たいへんよ！

「ほんとうだ。——ちや、兄さん、このくらゐで閉會にしていゝね？」

「さうだね、さうしようか、——ねえ、照三さん？」

「え、どうぞ兄さんがたのいゝやうに……」

「ちや、次夫、閉會の辭は君がやれ」

「では——」

と閉會の辭が述べられ、餞別が贈られて、送別の宴はをはつた。

目黒に住む照三と光子がまづ去り、次夫が離れにひきあげ、澄子は英子を一夫にあづけて、雪枝とともに臺所へ、あとかたづけに行つた。

座敷には、雅子と、赤んぼうを抱いた若い父親の一夫だけが残つた。

「姉さん」

と、その一夫が聲をひそめた。

「ぼく、ひとことだけ姉さんに聞きたいことがあるんだけど……」

「なあに？」

「いつたい、姉さんは、どんなつもりで満洲へ出かけるの？ 姉さんみたいな人が目的もなしに、たゞ漠然と満洲なんかへ出かけるはずはないと思ふんだけどそれも一月か二月ならともかく、一年もの豫定で……」

「あら、それだと、幾度もお話ししたやうに、要するに、ものすきよ、それが一等はつきりとした理由だわ。——でも、それで一夫さんが承知できないなら、研究のためといつてもいゝし、考へるためといつてもいゝし、骨休めといつてもいゝわ」

「ほんとにそのとほりだと思つていゝね？」

「……どうしてそんなに気にするの？」

「ウウン、べつに気にしてゐるわけぢやないけど、——でも、正直なところ、ほら、ぼくたち、月が變るとすぐ、この住みなれた家をひきはらつて、荏原の工場の近くに越すことにしてゐるだろ？ さうなると狭くなつて姉さんの部屋もなくなるし、それに……」

「ばかね！ 苦勞性だわ、あんたも、若いくせに。ほんとに考へないで、もうそんなつまらないこと！ そして、もつとしつかりしてねツ、一夫さん。あんたは室伏家の長男であるだけではなく、いまでは——たとひ小ッぼけな町工場ではあつても、愛國兄弟製作所といふ立派にお國のお役に立つ軍需工場の経営主よ！ そんな感傷的な氣持なんか、ふツとばしてしまはなくツちや！」

「……けど、これ、たゞの感傷的な氣持かしら？」

「だめ、だめツ。第一、戦火の巻を駈けめぐつて來たつは、ものらしくないわ」

「……」

ちよつと口をつぐんだ一夫は、やがて赤んぼうの小さい頭をなでながら、
 「姉さん、その姉さんがたづねてゆくといふ須藤さんて人は、姉さんの女學校時代からのお友達とかいつてたね？」

「え、さうよ、女學校から女子醫專……といつても、その人は醫學科ではなくて
 藥學科で、それも中途でお止しになったんだけど、とにかく、古くからのお友
 達だった昔の須藤喜代子さんよ、いまは堂々たるハルビン滿鐵病院の×科部長夫
 人！ つまり、須藤豊彦博士の奥さんよ」

「その人たちだけ、姉さんの滿洲での知りあひは？」

「まあね」

「……」

一夫はまた、しばらくだまりこんで、じつと考へてゐる風であつたが、ふと、

はッと思ひついたやうに、

「あッ、姉さん！ 進太郎さんは……」

と、目を輝かして雅子の顔を見つめた。

「進太郎さんはどうしただらう、高木の進太郎さんは……？」

「さうね、どうしたかしら？ なにしろ、もうまる九年も逢はないんだから……」

「こゝ三四年は手紙も來なくなつたね、もつとも、こつちからも、てんで出して
 はゐないけれど」

「お母さんが亡くなられた時にも、お悔みのお手紙は來たわね、三ヶ月も經つて
 からだつたけれど」

「あ、さうだった、そして、それにはこちらからも僕の名で挨拶状を出したん
 だつたけれど、——たしかそれが最後だったね」

「さうね」

ちよつと話がとだえた。と、一夫が、こんどは更に一段と聲を低めて、
「……ねえ、姉さん、姉さんの、こんどの満洲旅行は、進太郎さんとは何の関係
もないの？」

「まア、どうして？」

雅子は思はず激しく問ひかへした。が、その不自然なほどの激しさに自分でも
すぐに気がついて、ひとりでに頬が赧くなつた。かすかではあつたが……。
あくる日の午後、雅子は東京を立つた。

大陸通信

その1 弟妹一同へ

皆さん、無事に京城につきました。どうぞ御安心下さい。

三人の頼もしい弟、三人の優しい妹、かはい、姪のエイコちゃん、かうじた愛
と血につながる人々に、まことの心の花束をさげられて、むせるやうな幸福を
胸いっばいに抱きしめながら旅立ちました私……。ほんとに、ほんとに、ありが
たうございました。

東京——下關——釜山——京城、こゝまでは急行と寢臺を使つて直行いたしま
した。京城につきましたのは、東京を出て三日目の朝早くでした。

今夕こゝから急行に乗ることにして、ひるまだけ、こゝで休養、そして少しば
かり見物も……。

では京城神社の境内にて、とりあへずエハガキの裏に。

その2 第一夫へ

一夫さん。

夕方に京城を出る奉天ゆきの急行に乗りこみました。もうこの鐵路は滿洲へつづいてをります。まさに「この道は滿洲に通ず」ですね！そして私はいま、その汽車の二等寢臺車の中に、まことにユウゼンとしてをります。あゝ、やつぱり出てきてよかつた！と、しみじみ思ひます。で、その氣持で、自分の寢臺のカートンをキチツと閉め、トランクを机にして、この手紙を書きます。

一夫さん、さあ、ねむくなるまで、いろんなことをお話しませう。あの晩、あなたに聞かれてお返事できなかったやうなことについても、こゝではお答へしませう。

自分の弟として私はあなたが大へん好きです、愛してもゐるし、尊敬もし、期待もしてゐます。お父様は實によいあつぎをもたれたと、つくづく思ひます。私とあなたとは、まるで性格がちがふ、と、あなたは思つてゐられるやうですが、ほんとうは、やはり同じ血につながる非常に共通した性格をもつた姉弟だ

と私は思つてゐます。ただ、あなたと私とは、その性格のあらはれ方が、たいへん違つてゐるのだ、といふ風に私は考へるのです。

たとへば、あなたは正直で純真で、誠實に生きぬかうと考へる人で、そのために、ごまくわしや、いゝかげんなことや、納得のゆかない妥協や……そのやうなことの出来ない人なのです。

私にもまた、さうした傾向は多分にありますが、ただ、私は——あなたに比べて、するところがあるのです。このするさを、ほめてくれる人は「聰明」と呼び、けなす人は「おくびやう」とか「要領がいゝ」とかいふでせう。どちらだつて私はかまひません。とにかく、私は、とつちみち出来ないとわかつてゐることだとか、おそろしいことだとか、悲しいことだとか、とても不愉快なことだとか、さうした自分が近よりたくないことに對しては、——いゝえ、さういふことに對してだつて、ををしく突進すべきだと考へられる時には、その近くまでぐらゐは

これで勇ましく出かけて行きます、が、きりきりのドタン場の一步手前のところで私はヒラリと身をかはし、それを逃げたとはいはないで、自身をそこから遠ざけたのだといふ風に考へるのです。

むろん、私は自分のかういふ行き方が正しいとは決して思つてゐませんから、あなたに姉さんを見ならへなどとはユメユメ申しはしません。けれども、あなたも今のまゝではいけないと思ふのです。あなたのよい性格が、あなたの弱さと結びついてゐることが、あなたの不幸なのだと思います。それでも戦場から歸られてからは餘程よくなつたと思ひますが、でも私は「もう一步！」といひたいのです。もう一段だけ高いところに立つて、ものを全體的に、もしくは大乘的に、見かつ考へられてはいかがでせう？

いつだつたか、あなたは進太郎さんに、ずつと昔にホツペタをなぐられたことを思ひ出して、

「びしやツと、いきなりやられた時には、ぼく、目がクラクラツとなるほど痛かつたんだが、そのくせ、その瞬間に、ぼつと目のさきが明るくなつたやうな気がして、とても愉快だつた」

などと笑つてゐましたね？

このこと、私、考へてみると面白いと思ふの。

進太郎さんにそんなに深い考へがあつて、なぐつたのだとは思へませんから、なぐられて、その瞬間に、もしあなたの氣持が明るくなつたとすれば、その瞬間に、あなた自身のものの考へ方が變つたのぢやないでせうか？ とすると、その瞬間は何でせう？ 人生にはいくつかのかういふ瞬間があると思ふのですが……。

やれやれ、話が少しヤツコシクなりました。べつのことを書きませう。

あなたは、私が満洲に出かけることについて、あなたらしい氣のまはし方をして、いろいろ心配してゐましたね？ あなたは、きつと、かういふ風に思つたの

でせう。

「うちの姉さんは、最初の縁談にわがまゝを通して、結婚しそこねたばかりに、女子醫専を卒業し、やつと母校の附屬病院に勤めるやうになつて、やれやれと思つたとたん、昭和十一年の暮には、お父さんが亡くなられ、そのあくる年の夏には、お母さんがまた、お父さんのあとを追はれたので、それから後は父がはり母がはりとなつて、弟や妹たちのために、馬車馬のやうに働かなければならなくなつた。弟の入營、出征、戦傷……。工場の経営。嫁の世話、聾の世話……。かうした姉さんの苦勞の甲斐あつて、室伏家の若者たちはみな、どうなり獨り立ちが出来るやうになつたけれども、そのあひだに姉さん自身の青春は過ぎてしまつた！ しかも、いまでは姉さんは自分の生れた家にゐても、他家から來た二人の弟の嫁に氣兼ねをして、ゐづらいこともあるにちがひない。——そこで姉さんは自分から身をひくために、滿洲へなんか出かけて行くのだ。かはいさうに……」

あなたがさう思つてゐるだらうことは、私にも想像がつきます。あなたは平素いつも自分のお嫁さんと姉さんとのあひだに氣まづいことがないやうにと、こちらが氣の毒になるくらゐ、こまかく氣をくばつてゐます。

けれど、私はこゝにハッキリといひます。

「一夫さん、さういふ氣づかひは不要です、まつたく、よけいなことですよ」

なせなら、私は澄子さんと雪枝さんを眞實の妹として、光子と同じやうに、心から愛してゐるからです。私はこの人たちを自分の義妹だから、義理のある人だから……といふやうな氣持で愛することを好みません。さういふ氣持、つまり義理といふものを意識しての愛には、そこに必ず努力感や義務感が伴ふと思ふのです。けれど、さういふ愛は眞實の愛ではありません。さういふものを全然ぬきにし、超越して、ほんとうに愛さないではゐられないからの愛、絶對の愛！ 愛することによつて相手を幸福にし、自分も喜びを感じ、同時に、お國のためにも社

會のためにも通ずるやうな愛！ 私は自分の愛もさういふていのものでありたいと希ひます。もちろん、私自身の人間の浅さや、修養の足りなさから、さう希ひながら現實にはそれに反してゐるやうな場合も多々ありませうけれど……。

けれど、自分で右のやうに考へてゐることは事實です。

たとへば、澄子さんに對しては、私、乳兒の育て方について、よくおこごとを呈しましたが、さういふ場合だつて私は「この人は義理の妹だから、まあまあ大目に……」などと考へたことはありません。愛するから言はないではゐられないので、光子を叱る時と同じ氣持なのです。

「澄子さん、だめね、あなたみたいに、さう赤ちやんが泣くたびに、むやみとオツパイをやつては！ 赤ちやんの小ツちやいお腹のことを考へてごらんなさいよ」

「ええ、さう思つてはゐるんですけど、つい、忙しいもんだから……」

「思つただけではダメよ、思つてゐるうちに、赤ちやんは、ぐんぐんとそのよくない習慣の中で育つてゆくんですからね」

「え、氣をつけますわ、——でも實家の母なんかは……」

「お實家のお母さまが何とおつしやらうと、赤ちやんに、むやみやたらとオツパイを吞ませることはないわ」

「え、氣をつけますわ、これから、——なにしろ、お姉さんはお醫者さまだから、私、お姉さんのおつしやることは……」

「ちよつと待つて！ 私、お醫者だからそんなこといふんぢやなくつてよ、かはい、エイコちやんの叔母ちやんだからいふのよ。自分のお腹を痛めてエイコを産んだのは私だつて、あなたは思つてるでせう？ そりやさうよ、あなたはエイコちやんのお母ちやんよ、世界でエイコちやんを愛する權利……愛する權利よ、それを一等たくさん持つてゐるのはあなたよ、それは認めます。けど、だからとい

つて、あなたがエイコちゃんを自分ひとりのものだなどと思つたら、大まちがひよ、エイコはあなたの子供であるのと同時に、一夫のものであり、私のものであり、室伏家のものであり、大日本帝國のものなのよ。——うあい、くやしい？」

「ホ、、、さういふ考へは立派で、氣持がいゝわね！」

「さうよ、立派な考へよ、みんなで心をあはせて、いゝ子のいゝ子のエイコちゃんにしませうね！」

「ええ、ほんとうに。……私、うれしいわ、いゝところにお嫁に來て！」

澄子さんはさういひながら、涙をうかべて、笑ひました。

それから私はまた、次夫の妻に對しても、よく臺所のことで文句をいひました。

もつとも、この人の場合は、至つて話が單純です。

「雪枝さん、雪枝さん！ だめね、あんた、せつかく臺所に幾段にも棚をつらしたのはいゝけど、あの道具のおき方は……」

「あら、さうですか、ごめんなさい、ちや、さつそくおきなほすわ」

「いやな人！ 私、まだなんにも言つてやしないぢやないの？ よいかわるいかも考へてみないうちに、あやまることないわ」

「あやまるに如くなしよ、どうせお姉さんの方が正しいにきまつてるから」

「やれやれ、のんき夫人にはかなはない！」

さういつて私たちは、けつきよく笑つてしまふのがオチです。

およそ、かういふ風で、私たちのあひだには、いはゆる「嫁と小姑」みだいな氣持は、ツエほどもあり得ませんでした。つまり私たちのあひだには、どのやうな技巧的なものも無理なものも必要がなかつたのです。いまもさう信じてゐます。

けれども、私は光子によつて、ちよつと考へさせられたことがあつたのは事實です。

いつでしたか私は病院が早くひけたので、われわれの「あぶなッかしい若い奥さん」の新婚生活を注意かがたた、のぞいてみてやらうと思つて、ひよつこり訪ねたことがあります。すると、あまりに家の中がとりちらかつてゐるので、例のとほり、ふたことみこと私が注意をしますと、いつもは要領よく返事だけして私たちの鋭鋒を避けようとする、あのわれわれの「末ツ子の、あまえんぼう」は、その日に限つてロクク返事もせず、あべこべに私に向つて颯爽と一場の訓示を垂れたものです！

「お姉さん、あなたは科學者ですから、家庭生活も科學化し合理化さなげやいいないと思つてらつしやるんですか」

「ええ、そりやさうするのが正しいとは思つてゐるけど、——さて現實となるとね！ それに私なんかは家庭生活なんていふほどのものぢやないわ、正直なところ、私のは、きはめてゐごこちのよい下宿人みたいなものでね！ なにもかも

今では澄子さんと雪枝さんに委せツきりで、朝出て夕方に歸つて寝るだけなんだから」

「それでも、やつぱり嫂さんたちにも遠慮なく注意するんでせう、いろいろ」

「さあ、それが出来ないから、あの人たちにも一夫や次夫にも、すまないと思つてゐるのよ」

「さうかなア。——ぢや、やつぱりお姉さんは、ものを見る目が普通の女の人とはもう違つてゐるんだわ、ご自分では氣がつかないでも」

「なんの話？」

「ウウン、なんの話つてことはないけど、——あたしね、お姉さんがその鋭いアタマで、若い嫂さんたちに、あんまりツケツケ注意をしたり、こごとを言つたりしやしないかと思つて、それを心配してるのよ、家にゐた時あたしがやられたみたい」

「といふと、どんなこと？」

「なんでもないことよ、むろん、そりや小ツちやいことだわ、水道の栓はよくひねつておけたとか、外から歸つてきたら、なるべくウガヒをせよだとか、寒い日でも一日に何回かは必ず窓をあけよだとか、それから……」

「だつて、そんなこと苦にすることないぢやないの？ 習慣になつてしまへば、そんなこと、なんでもないことで、お説教なんていふものぢやないわ」

「そこがちがふのよッ、お姉さんには、なんでもない、あたりまへのことでも、普通の、殊に女の人なんかには、氣が小さいだけに、とても窮屈で、つらいのよ。——お姉さんなんか、リコウでスキマもヌケメもないだけに、小姑としては一等しまつのわるい部類の人だわ」

「ひどいことをいふ人ね！」

「だつて、あたし、お姉さんのやうな人には、誰からも嫌はれたり憎まれたりさ

せずに、高い山にそびえてある大きな木みたいであつてほしいのよ。といふのもあたしがお姉さんを尊敬してるからよ。——それと、もうひとつは、二人の嫂さんたちのことも考へて上げたいからよ」

「……あの人たち、あなたに何かそんなことを言つて？」

「ウウン、あの人たち、お姉さんのこと、いつだつて寝めちぎつてるわ。二人ともバカぢやないから、あたしたちに向つてお姉さんの悪口いふはずもないし……だから、これはあたしのオセツカイよ、でもね、お姉さん、結婚してまだ一年にさならないあたしが、こんなこといふのはヘンだけれど、家庭生活なんてものは決してお姉さんが考へるやうなものぢやなくつてよ、そんな學校で習つたリクツやガクモンや、それからアタマだけで考へたことを、そのまんま試験管に入れてふりまはしてみたり、すかして見たりするやうな、そんなものでは絶対にないと思ふわ。家庭生活といふものは、もつとコントンとして、ぼろッとして、と

ここにスキマもヌケメもあつて、ゆとりのあるものよ、それでいゝんだわ。そればつかしでは、むろん、いけないでせうし、いくらかづつでも良くならうといふ心もちはなくちやいけないでせうけれど、その良くなり方の道や順序は人さまさまよ、いろいろよ、十人十色よ。だから地人に自分の流儀をおしつけちやいけないんだわ。げんに家の照三なんかもネ……」

この(うちの照三なんかもネ)からさきが要するに光子のいひたかつたところなので、それから堂々まさに數萬言、それは實に大變なものでした。あの大きな目を一層グリグリさせてね！ まつたく、この日の光子の雄辯には私も壓倒されました。けれども、この時の私は、おや、この子は、今日はアタマが少しどうかしてるんぢやないかな、ぐらゐに考へてゐたのでした。

ところが、それから日が経つにつれて、不思議と私の頭の中には、この(われらの幼き光子夫人)の聲が、一種の力をもつて響いてくるやうになりました。

けれど、一夫さん、以上のやうなことは、要するに私が旅に出て汽車の上で、たまたま無爲の時間を持てたものだから、考へずとものことまで考へて、いはば無理に形をつけてみたまでのことで、私の滿洲旅行の動機は、斷じて右のやうなところにあるのではありません。ほんとに安心して下さい。

あゝ疲れた！ さいはひ、ねむくもなつて來ました。今夜はもう止めませう。

ガツタン、ゴットン、ガツタン、ゴットン、ガツタン、ゴットン、ガツタン

……。

これ何かごぞんじ？

のうのうと寢臺車に横たはつて、自分の乗つてゐる汽車の走る音を聞くのは實にいゝものね！ これは詩だわ。詩よ！

ガツタン、ゴットン、ガツタン、ゴットン……。

おやすみなさい、東京の人たち！

その3 弟次夫へ

お早う、親愛なる次夫クン！（フンガイしてはダメよ、あんたにはかういふ呼びかけが一等ピッタリしてよ）

さて目がさめてみたら、もう安東でした。ばんざい、もう満洲よ！

こゝで税関の検査。私のは、いともかたんにパス！ 停車四十分。そこでプラトフォームをブラリブラリ。フォームにウドン屋さんがあつて、紳士たちがツルツルツル……とやつてゐます。ちよつとおいしさうですが、淑女はガマンして、そのかはりこのお便りを書くわけ。

さて、わがツギ坊よ、——なほいけねえや、なんて言ひツこなしよ、ツギ坊はいゝ子だから。これはほんとうです。私は一夫兄さんとともに、あんたをどんなに期待してゐるか知れませんが、あんたはいゝ人です。明朗で潤達で、自分の欠點

を素直にみとめるとともに、他人の長所を十分に尊重するからです。一夫さんのそばにツギ坊がゐるかぎり、わが室伏家は萬々歳です。そして愛國兄弟製作所の前途も！

ぐわんばれ、ツギちゃん！

安東にて 姉

その4 留守宅一同へ一夫宛に

十四時六分——といふのは午後二時六分ですが、つつがなく奉天につきました。どうぞ御安心下さい。たいへん元氣です。

こゝに二泊して、それから特急アジアで、いよいよ一路ハルビンへ向ふこととなります。

ハルビンの須藤様のお手配により、満鐵関係の方が案内から特急券のお世話ま

でして下さいますので、いさ、かの不安もありません。どうぞ、そのことも御安心下さい。

その5 第一夫へ

ハルビンに来て、もはや一ヶ月になります。すっかり御無沙汰をしてすみません。

「姉さんは、きつと、うてうてんになつてハルビン情緒を満喫してるんだらう、うちのものに便りをすることも忘れて」と皆さん思つておいでかもしれませんが、實をいふと、私はそのハルビンなるものを職場を通して見てゐるだけで、こゝについて三日目からもう病院に勤めてをります。私といふ女にとつては、けつきよく、働くことが生きること、生きることの喜びも幸福も仕事の中のみあるのだといふ氣がいたします。

とにかく元氣ですから安心して下さい。皆さんには、あなたからよろしく……。

ハルビンも完全にもう夏です。松花江にはヨットが浮かび、エミグラントの娘たち……には限りませんが、水浴の人々が、まさに人魚のごとです。

その6 妹光子へ

九月の聲を聞くと、もう秋の風が吹きはじめ、十月にはすっかり冬になりました。さすがに北満ですわね。私、フンパツして毛皮の外套を買ひました。とても豪華版です。但、私の持物としてはよ！ ロシヤ人たちにとつては、この毛皮の外套がなにより大切な財産で、お嫁入りの道具の第一位ださうですが、この寒さではそれも尤もなことだと思ひました。姉さんは、しかし、北満で迎へる最初の冬ですから、寒さに負けまいとして、はりきつてゐますので、とても元氣です。

さてミイちゃん、たいへんなニュースを聞きましたよ。ミイちゃんが照三さん

にホツペタをなぐられたといふ、おそらくミイちゃんにとつてはゼンダイミモンの大権事を!

それ、ごらんない。

あんたは旦那さまに對して、あんまり自信家すぎますよ。

あなたは、その時、照三さんに、野蕃人! といつて、泣いたり叫んだり大騒動をやつたさうですが、——そして私も(なぐる)なんてことには、むろん、賛成ではありませんけれど、あの照三さんが、かはいくてたまらないミイちゃんのホツペタに手をやるなんて、それはきつと、よくよくのことだつたらうと思ひます。——誤解しないでね、私、決してアタマから照三さんの味方をしてゐるのぢやありませんよ。私はたゞ、なぐつたといふその行爲だけでもつて照三さんの凡てを批判する氣になれないといふのよ。そこに行くまでには、きつと、さうせずにはゐられなかつたやうな何かがあなたの方に平素あつたのだらうと思ひます。

ほんとに氣をつけなくちやダメね!

旦那さまを尊敬なさい。

男の人たちは、内地にゐる時はお國の産業のために働き、一旦お召にあづかれば、命を的に戦場に行くのよ。家にゐる妻が愛の杖となりムチとなつて、扶け、はげまし、いたはつて上げなくちや、ダンナサマだつてかはいさうよ。

男と女とが結婚するのは、おたがひに相手を幸福にし、おたがひに向上するためなのです。結婚しておたがひに相手をダメにしあふやうな夫婦を、姉さんはケイベツします。夫を愛することが、そのまゝお國を愛する精神に通じないやうな妻の愛なら、姉さんはそれをケイベツします。ただ心のおもむくまゝの反省も向上もない愛ならば、鳥だつてケモノだつて……こんなこと言ひすぎね! ごめんない。

けど、とにかく、結婚は建設よ、あらゆる建設の中で一等大きな建設です。こ

れは眞理です。その意味で私は亡くなられたお父さまお母さまの夫婦生活を讃美します。ほんとに何といふそれは美しい生活だったでせう。おたがひに扶けあひ、いたはりあひ、はげましあつて、文字どほりハダカ一貫から一歩々々と築き上げて行き、私たち四人の子に、財産のかはりに、尊い智慧を、強い體を、へこまない勇氣を、そして何よりも尊い「日本人の魂」を遺して行つて下さつたお父さまとお母さま！

ミイちゃん、あなたもやがてはお母さんとなる人ですよ。亡くなられたお母さまに恥ぢないやうな、よいお母さんになつてね！ 子供に親以上のことが出来ないとすれば、私たち、人類の進歩に希望をもつことが出来ないわ。日本人の母たる喜びと誇り！ それを忘れてはいけません。

姉さんがお嫁さんになつた経験がないといふのを理由にして、私のいふことを馬の耳で聞き流すなら、あなたはほんとうのオバカサンよ。

次夫兄さんの手紙によると、私のいふこと書くこと、すべて皆さんから見るとお説教みたいださうで、さう見られることは私としては、なんとも淋しいことだけれども、ねえ、ミイちゃん、こんどのこの手紙だけは、最初ツからそのつもりで書いた正眞正銘のお説教よ。

よい奥さんになつてね！

そのかはり、お正月にはマルスのチョコレートをお送りしてよ。

それから、なにかひとりで困るやうなことがあつたら姉さんに知らしてね！

ミイちゃんも女、姉さんも女、女は女同志でなくちやいへないやうなことが、

出て来ないともかぎらないわ。

おからだの工合なんか變りない？ あつたら知らせなくちやダメよ。

楡の並木

ついでにもう一通だけ雅子自身の手紙をこゝに挿んで、それから話を進めることにしよう。

早いものですね、ハルビンへ来て、もうまもなく一年になります。

その一年のあひだ、あゝあ、私は何と忙しく働きつづけたことでせう。でも實に愉快でした。……やつぱり私も働くことの好きな室伏一族ね！

さて、一夫さん。工場の方もうまく行つてるさうで、たいへん安心しました。ほんとに喜んでをります。経済の方の問題も大森の家だけで、まづトントンにかたづいたさうで、ほんとに結構でした。さぞかし次夫クンもハリきつてゐること

でせう。この戦車みたいな男、むしろ、働きすぎないやうに御用心！ 人間は生身ですからね、限りがありますよ。さうつたへて下さい。

ところで、遺産の分け前つて何ですか？ つまらないこと考へるものではないです。私に女の子のくせに、男の子のあなたがたよりも、五年も多く、お父さまから勉強させていたゞきました。この上なんの遺産ぞや、です。

結婚の費用？ はばかりさま！ 自分でかせぎます。

さて、一夫さん、次夫氏によると、私の手紙は、いつもお説教みたいださうですが、さう見られるとすれば、たいへん本意なこと、私としては、これでも一途に弟や妹への愛を囁いてゐるつもりなんですのね！ ちよつとばかし淋しいわ。

そこで大いに姉さんの若いところを見せて、今日はひとつ、北滿の初夏の太陽のやうなお便りをしませう。

題して、楡の並木！ なかなか詩的なもんでせう？ この姉さんにも、この程度の詩精神はあつてよ。誰ですか、うへツ、詩精神だとさ！ なんて笑つてゐるのは？

では本筋に入ります。

この前のお休みの日のことです。私は須藤夫人（お友達の喜代子さんよ）と、こちらの名所の一つみたいになつてゐるロシア人の墓地へ散歩にまゐりました。こちらに来て、やがて一年にもなるといふのに、この日ほど、のんびりとハルビンを歩いたことは、まだ一度もなかったのです。私も無論さうでしたが、のんきで陽気な喜代子夫人も、さすがに三人もの子のお母様であつてみれば、これまたヒマなし、おなじ屋根の下に住んでゐながら、實は私たち、この日はじめて、ゆつくりとお話をしたやうな始末よ。むろん、とりとめもないお話よ。けど、とりとめもないお話も時たまにならば案外いゝものね！ ちよつと愉快かつたわ。

目がさめるやうに青々とした楡の並木を、女學生の昔のやうに手などとりあつて、ぶらりぶらりと歩きながら、おしやべりをしてゐるうちに、

「ときに雅子さん、あんた、どうして結婚しないの？ い、え、牧野理學士の一件は知つててよ、その後のことさ。——もう絶対にしないつもり？」

と、いきなり喜代子夫人がたづねました。

あなたもごぞんじのやうに、私はもう、かういふ質問には馴れツこになつてゐます。ですから、あつさりとは軽く答へました。

「絶対になんて、そんなバカなことないわ。むろん、するつもりよ。いゝ方があつたらお世話して下さいよ」

「あなたがその氣なら、そりやいくらでもお世話してよ、——けど、だめね、あなたのやうに理想が高くツちや！」

「あれあれ、やつぱり、あなたもさういふのね！ コツケイだわ、私のやうな現

「賞家を」

「ちや、いままで結婚をしないほんとうの理由は、なあに？」

「機会を失つたといふだけよ、ほんとうの理由は、そりや最初の話がウヤムヤになつた後にだつて、話はあつたわ、いくつも。——けど、どれも乗氣になれず、ぐづぐづしてゐるうち、ごんごん學年が進み、だんだん慾が出てきて、途中で學校を止すのが惜しくなつてきたのよ。で、つひに卒業！ お醫者さまになりました。月給も頂戴するやうになりました。ところが、そのうち家庭の情勢ガラリと一變、とても結婚どころではなくなつたといふわけよ」

「だと、お氣の毒ね！」

「氣の毒がられることもないわ、いくらも世間に例のあることよ。それに御本人が案外これで生甲斐を感じてるんだから」

「理想の人はないの？」

「残念なことに」

「初戀の人とでもいふやうな人は？」

「うふッ、ハツコヒの人か……」

「といつてをかしければ、——さうね、たとへば、をさななじみ、とでもいつたやうな人よ」

この時でした、私が一夫さん、言葉を思ひ出したのは！ 去年の今頃、——ほら、わが室伏一族が私のために送別會をひらいてくれた夜、そのあとで、あなたが、

「姉さんの、こんどの滿洲旅行と、進太郎さんとは、何の關係もないの？」

と聲をひそめて私にたづねた言葉！

この言葉を私はこの時ふと思ひ出しましたので、喜代子夫人に、あの人のことを、むしろ、おもしろをかしく語つたのでした。

ボウバクとしたカレの風貌や、そのヒョウヒョウたる性格……それから、カレの少年時代、私の幼女時代、トンボつりのこと、セミとりのこと、さういつた佐世保時代の思ひ出などを……。

すると夫人は案外おとなしく眞面目に耳をかたむけてゐましたが、そのうち、

「その人を一度たづねてみない、とにかく？」

と、意味ありげに私の方を見ました。

「ええ、たづねてみたい気は私もあるんだけど、なにしろ、あところがわかんないのよ、三四年前までは一年に一度か二年に一度ぐらゐは手紙も来てゐたので、その宛名で奉天の方を、ちよつと調べてみたんだけど、その人がゐた下宿……下宿か同居か知らないけど、とにかく、その人がゐたらしい家はないのよ」

「ないって、家が？」

「家はあるかも知れないけど、その番地にはさういふ人がゐないのよ。なんでも

近所の人の話では三四年前に北支へ行つたとかいふんだけど、それとてもあてにはならないらしいの」

「もし北支へ行つたとすると、その高……高木さんて方も一しよに？」

「むろん、そこまではわからないわ」

「雲をつかむやうな話ね」

「さうよ、さういへば、その人自身が、どつか雲みたいなところがあるわ。——けど、とにかく、満洲にあるにしたところで、その人だつてもうとつくに結婚して子供の二人か三人ぐらゐはあつてもいゝ年輩なんだから、あなたのおつしやるやうな意味でなら、たづねてみても仕方がないのよ。でも、たゞ兄貴に逢ふやうな氣持で、私、ほんとういへば、とても逢ひたいの」

私の言葉が、きつと、いくらか咏嘆的な調子に響いたのでせう、喜代子さんも氣がるには答へやうがなくなつた風で、それなり口をつぐみました。私もまた、

それ以上は語らないで、青葉が匂ふやうな楡の並木を、さらに足をゆるめて、ゆつくり歩きながら、一年前のあなたの言葉を、今頃になつて自分でも眞面目に考へはじめました。そして、その時のあなたの質問に答へようといふのが、實をいふと私がこの手紙を書きかけた目的だつたのでした。そもそも私は

雅子がそこまで書きかけた時、トントンと氣せはしく階段を駆けあがつてくる足音が聞え、すぐにコトコトと扉がたゝかれた。と同時に、

「雅子さん！ 雅子さん！ 室伏先生！」

と、喜代子夫人の聲が聞えた。

書きかけてゐる手紙の内容が内容だつたので、雅子も、いくらかあわてぎみに机の前をはなれると、さしこんだまゝの扉のカギをまはして、

「はい、はい、なあに、奥さん？」

と、扉をホンの少しあけて、そこから顔だけをのぞかせた。

「先生、いま、いそぎの御用してらつしやるの？」

「いゝえ、弟に手紙を書いてたところよ、久しく出さないから、——でも、なあに？」

「ウウン、よかつたら、お茶でも淹れようと思つて」

「すみません。いたゞくわ。——でも、先生お歸りになつて？」

「ええ、いま。——あなたに何かお話があるんですつて。病院の御用らしいわ、すぐいらつしやいよ」

「ええ、たゞ今……」

喜代子をさきに去らしておいて、雅子は、書きかけの手紙を机のヒキダシにし、まふと、すぐに階下へおりて行つた。雅子が借りてゐる二階の洋間のほかに、階下にも、應接室を兼ねた主人の書齋があり、それも相當とつしりと重みのある立